

325

352



始





71175



新 版

信仰より見たる人生

文學博士 高楠順次郎序  
文學士 泉道雄著

東京 至文堂 發兌

大正  
4. 4. 21  
丙交



2020

人...  
...  
...

常一の如せり一返うすうと  
なう也

右承物大印法語一巻一

七一一篇為とも也

亥録







人身うけりし佛法のふこ  
 とまじりなりいばわれら宿善  
 のたすくるところすまきうけ  
 かこき人身をうくるのみる  
 らいあひうたき佛法のむ  
 いまの身をま生死のなう乃善  
 生最勝乃生な多く最勝は  
 善身なりうりしう  
 常一のかせりうすうす  
 なうせ

右承物大師は語一巻

七十一卷為高にも書

高経





## 序

實際生活に遠ざかりたる宗教は、社會に存在するの權利なきものなり。理に於て高遠なる宗教は、同時に事に於て近易ならざる可らず。孝を本位とせる家族的實際の生活は、親の心を以て心とする點に於て、父子一心の理に適ひ、社會的實際の生活は、仁義を以て本位とし、自を以て他を量り、己の欲せざる所人に施さざる點に於て、自他平等の理に適ひ、忠を本位とせる國家的實際の生活は、君の心を以て心とする點に於て、君臣一如の理を全ふす。而して個人的實際の生活に於ては、人のその方に迷ふもの比々皆然り。自己をのみ標的とせる點に於て、自主自由主義の惡弊、自利己主義



の僻見に陥り、遂に恐るべき危険主義に染着するに至る。この悪傾向は獨り我々の個人的生活を以て、宗教的生活となすに於て、救済し得べきのみ。蓋し信仰に依れる個人的實際の生活は、自己を標的とせずして信仰の對象たる佛身を以てその標的とし闇黒に没入する代りに、漸く常住の光明に進出し、利己主義は轉じて利他主義となり、自損損他の呑噬主義を離れて、高尚なる自己犠牲の尊ぶべきを悟るに至るべし。かゝる信仰生活は所謂佛の作さしめ玉ふ所をば則ち作し、佛の捨てしめ玉ふ所をば則ち捨つ。是れ即ち眞佛子の生活にして、完全なる個人的生活なりと謂ふべし、是れ亦佛の心を以て心となせる點に於て生佛一如の理を全ふす、是れ二而不二の理を實際に行ふべき所謂四種の生活なり。予曾て日

曜學校教案に於て之を詳説せるも、更に自内證の實際に依りて之を近易に適切に細説する人あらんことを要望せり。而して今之を泉道雄兄の斯著に得たるを喜び叙して呈す。

大正四年四月十一日明如上人第十三周祥の初日

京都堀川の客舎に於て

高楠順次郎



緒言

古人が「世の中を渡りくらしていまぞ知る、阿波の鳴門に波風もなし」と云つたが、人生五十年の行路程變化と複雑とに富んだものはない。此複雑なる人生に處して、よく平和なる生活を送らしむるものは、唯それ信仰の力のみである。

信仰は證悟である、實驗である。知解や分析で分るものではない。恰も酒や煙草の味ひが、酒や煙草を飲む人てなくては分らぬ如く、信仰の味ひも、證悟した人、實驗した人てなくては、到底分るものではない。

予の同郷に熱心なる信者がゐた。村で一番の財産家で、村民は



之を「大將」たいしやうと呼んでゐた。同じ村に漢籍かんせきの師匠しやうがゐた。村の人々はその人を「先生」せんせいと呼んでゐた。「先生」と「大將」とは共にこの村での上席じやうせきに坐る人であつた。只「先生」は非常に清貧せいひんで、而も大の佛教嫌ぶつしやうけんであつた所が、大將と違ふ所である。

あるとき村民は先生の老後らうごを慰めん爲め、義金ぎきんを募つることを計畫けいした。其發起人ほつきにんの筆頭ひつとうは無論大將であつた。一日先生は嚮きやうの禮れいの爲めに、大將を訪ねた。折悪なりあしく大將はお寺詣りてらまゐりして不在ふざいであつたので、先生は妻君さいくんをつかまへて、大にお寺詣りてらまゐりの攻撃こうげきを始めた。

「一體、これの大將も分らぬ男だ。何時もく寺詣りてらまゐりをして、坊主ぼくしの云ふ同じ事を、あり難がたさうに聞いて喜んでゐる。抑々おほくわひ譯わけが分

らぬ。……説教位せつけうゐ俺わしでも聞かせてやる。……あんなものは一遍聞いたら、それで澤山たくさんだ。分りきつてゐるではないか。それにお前まへまでが附ついて騒さわぐから、たまらない。お前まへ丈だけでも寺詣りてらまゐりを止とめるがよい」

妻君さいくんは夕方大將が歸るのを待つて、委細わいさいの事を大將に告げた。すると大將は「きつと敵討かたきりちをやつて見せる」と云つて、なか／＼の立腹りつぷくであつた。

二三日たつて先生が來た。大將も妻君も、いつもの様に歡待くわんたいした。暫らくして先生が煙草たばこを吸すはふと思つて、煙管きんくわんを捜さがすけれども見付みづからない。確たしかに膝ひざの下に置いた筈はずの煙管きんくわんが分わからない。累しきりと捜さがしてゐる。夫婦ふうふは知らぬ顔かほして見てゐたが、



大將「先生何をお捜しになりますか」

先生「俺の煙管が見付からない、……確かこゝに置いたと思ふのに

……」

無論見付かる筈はない。實は大將が豫め妻に言ひ含め、折を見て密かに先生の煙管を奪ひ取らしめたのであつた。やゝ暫らくして、

大將「先生これではありませぬか」

と煙管を示したので、

先生「おゝ、それ〜、お前が蔭してゐたのか……意地の悪るい……」

さあ返してくれ」

大將「先生、煙草がそんなにお甘しう御座いますか」

先生「お甘しいとも……」

大將「あなたのお若い時と、お年寄りになられてからと、煙草の味に變りがありますか」

先生「變りはない、いつも同じさ」

大將「昨日の味と、今日の味とどつちがお甘しいですか」

先生「同じことさ。そんなにくどく聞かないで、早く煙管を返へして呉れい」

大將「いや、なりませぬ……先生あなたは貧乏の癖に、毎日〜煙草を飲まるゝが、こんな不經濟はありませぬ。それも、毎日味が變るとてもいへば、まだしも、同じ味のするものを、そゝ毎日繰り返へさなくとも、一度すつたら、澤山ではありませぬか」



先生、そんな事をいつたて、一度で止まるものではない」  
是に於て大將容を改めて、

「先生！先達てあなたは私の留守に入らして、妻に向つて、さんざん私の寺詣りの悪口をお仰つたそうですが、あなたは此煙草が止められない癖に、私のお寺詣りを攻撃するとは以ての外です。煙草位でも味を思へると容易に止められないのに、どうして有難いこの御法の御話が聞かずにゐられませう。私のお寺詣りを止める前に先づあなた自身の煙草をお止め下さい。私はあなたの決心を聞くまでは、此煙管を返すことは出来ませぬ」  
と力強くいつたので、流石の先生も大弱りして、

「いや俺が悪かつた。もう、けつしてお寺詣りの悪口を言はぬから、煙管を返してくれ」

と平身低頭して、やつと煙管を返して貰つた。爾來先生は決してお寺詣りの悪口を言はぬばかりか、之が縁となつて、後には深き信仰の人となつたのである。

此實話は信仰の妙味を味ふべき好例話である。實に信仰は事實である、證悟である。口舌のよく盡す所でない。所謂離言絶慮である。言語道斷である。かゝる境地に到着したる人は、眞に人生の幸福を享樂することが出来るのである。

本書は予が信仰眼に映ぜる人生の披瀝であるが、又一面から見れば、如何にせば信仰に入るべきか、如何にして人生に處すべきか、



乃至、道德と宗教との關係、宗教と教育との關係如何等の諸問題を側面より解釋したものと見ることゝ出来る。若しそれ本書によつて聊かにても信念の何たるを解し人生々活の上に一道の曙光を認むるものがあつたなら誠に望外の至である。

最後に附記しておく。本書は予が嚴父曾我道宣の還曆祝賀紀念の意味を以て之を出版するものである。

大正四年四月十日

東京麹町中六番町の假寓にて

道雄識す

## 信仰より見たる人生

### 目次

信仰より見たる人生……………一

▲悲觀か樂觀か ▲黴菌にも害あり利あり ▲死も亦芽出たし ▲信仰眼に映れる世界 ▲徹底したる眞の樂觀……………一

心の富……………一一

▲富に三等あり ▲家の富 ▲身の富 ▲心の富 ▲心の富と宗教 ▲伊藤氏の先代……………一一

無我の生活……………二五

▲平和なる生活は無我にあり ▲完全なる利他も無我にあり ▲我執我慢は自損の基 ▲白隠禪師の無我 ▲無我と修養 ▲他力教と無我……………二五

教育家としての釋尊……………四一

▲教育家の資格 ▲豊富なる知識 ▲慈愛の精神 ▲崇高なる人格 ▲教授の才能 ▲模範的大教育家……………四一

反省と修養……………五三



▲積極と消極の修養 ▲人の悪事は我辯護 ▲不善人は善人の資 ▲如來様に足を向ける  
自分 ▲蓮生坊の忍耐 ▲鬼の念佛 ▲蓮師の訓誡

舜を學ぶの徒……………一六五

▲慚愧の伴は告白 ▲徒然草の教訓 ▲舜を學ぶは舜の徒 ▲備前の孝子 ▲殊勝なる  
尼僧の身の上 ▲弱き女の奮闘 ▲懺悔と感謝の生活

迷信とは何ぞや……………一七九

▲迷信と學問 ▲學理の變遷 ▲迷信の種類 ▲信する價值なきもの ▲現世利益—祈禱  
▲天海僧正と火の柱 ▲根據なきもの—日の吉凶 ▲方角の迷信 ▲符札の迷信 ▲知ると  
信すると ▲正信に安住せよ

先帝の御聖徳……………一九六

▲老子の三寶 ▲慈悲ある勇氣 ▲恐れ多き御儉徳 ▲偉大なる謙徳

宗教に入るの門……………二一〇

▲各異れる求道者の動機 ▲宗教の眞面目は他にあり ▲靈の救済と絶對的價值 ▲罪惡  
觀を通過せざるべからず ▲道徳的罪惡觀と標準の高低 ▲小川博士の懺悔談 ▲窮極せ  
る罪惡觀は救済を仰がしむ ▲宗教の信仰は親の大慈を仰ぐが如し

懺悔の價值……………二二六

▲卑劣なる態度 ▲懺悔の價值 ▲煩悶と虚榮 ▲四人の自白 ▲惑業苦 ▲天を相手に  
せよ

相對の信と絶對の信……………一三九

▲相對の信 ▲曾參とオセロ ▲器物は壞るゝものなり ▲慰安者たる御佛 ▲隨蓮坊の  
信仰 ▲高楠博士の逸話

念佛と修養……………一五〇

▲信仰と修養 ▲五種の修養法 ▲修養法の難易 ▲念佛の四長所 ▲最も進歩したる信  
仰形式 ▲無限の意義を含む ▲佛凡融合の力あり ▲信仰を圓熟せしむ ▲救済は信の  
一字に歸す

易行即難行……………一六六

▲難易の二道 ▲青年は難行の道程にあり ▲自力難行の悲哀 ▲易行品に現はれたる二  
道 ▲致富の秘訣は水汲み ▲親鸞聖人の易行 ▲心は眞の親に非ず ▲賢妻たらんより  
愚母たれ

心の平和……………一八〇

▲無駄な取越苦勞 ▲莫妄想の三語拾萬の元寇を破る ▲俳人一茶の信仰 ▲安直な諦め  
主義と取越苦勞 ▲盗人怖はや火事恐るしや ▲危き生命 ▲死を怖れつゝ闕死した高利  
貸 ▲死んだ先きの覺悟 ▲飛行偵察の成功とお守の力 ▲眞の心の平和は唯信佛語に在



求道の態度……………100

- ▲南隱禪師の一喝 ▲老年と青年の求道 ▲曖昧なる自分決めの安心 ▲親鸞聖人の求道
- ▲法然上人の求道 ▲美術家の苦心 ▲佛教と基督教との差別 ▲長者の一人息子
- ▲懺悔して後家に歸る ▲獨歩の遺言やいなし ▲救世軍より眞宗へ

信仰の絶対性……………115

- ▲信仰は如何にせば得らるゝか ▲きりつめた書き振り ▲絶対の自力か絶対の他力か
- ▲大至誠心の披瀝 ▲一枚起請文 ▲嘆異鈔に對する感想 ▲自己の未練を離れ

社會恩に對する道……………124

- ▲悲惨なる犠牲者 ▲痛切なる二個の教訓 ▲淺薄なる現金主義 ▲文明の利器は犠牲者の賜なり
- ▲如何にして社會に酬ゆべきか ▲他人の問題に非ず自己の問題なり

畏敬すべき校僕……………134

- ▲感心なる老爺 ▲校僕となりし因縁 ▲忠勤なる働き振り ▲驚くべき廢物の利用
- ▲彼が副業 ▲非常なる節儉家 ▲一廬の慈善家 ▲皆是れ信心の餘徳

目次終

信仰より見たる人生

文學士 泉 道 雄



信仰より見たる人生

▲悲觀か樂觀か

人生は果して樂觀すべきかはた悲觀すべきか、容易に決すべからざる問題である。自然界の現象や社會の現象は、極めて複雑である。それは只だ善でも悪でもない。が、一度吾々と交渉を結ぶに至つて、善惡の評價が下さるゝ。乃ちあるものは、自分に取つて非常に都合のよいものとして喜ばれ、或物は非常に都合の悪いもの

信仰より見たる人生



のとして嫌はれる。又同一現象でも時と場合とはよりて、非常に歓迎せらるゝこともあれば、又反対に厭忌せらるゝこともある。世間の人々は此複雑なる現象を漠然と歸納して、それが自分に取つて幾分か好都合のことが多くあるかの様に想定して、人生を樂觀視するものもあれば、又あるものは自分に取つて都合のよくないことのみ多くある様に測定して、人生を悲觀し厭世する人もある。何れも徹底した見方ではない。嘗て外國に地震があつて、甲地に非常な被害を及ぼしたことがあつた。甲地方の人々は此の世を悲觀し、神の恩寵までも疑ふに至つた。ところが之れと同時に乙地方には、地震の爲めに有効なる温泉が湧出した。此の地の人々は非常に喜んで、之れは天の賜物であると云つて、神に感謝した。

た。此の如く同一の出来事で、一方の人は非常に悲觀し、一方の人は非常に樂觀したが、暫く人類外に超越して眺めて見れば、別に樂觀すべき理由も悲觀すべき理由もない。天は一方の人に禍し一方の人に幸すると云ふが如き私心偏愛のものではないが、相對界に執着して考へてゐる間は決して此の疑は晴れないのである。

▲ 微菌にも害あり利あり

彼のバクテリアは人類の一大強敵である。ペスト、コレラ、チブス、チフテリア、癩病其他結核性諸病は皆悉く此の微菌の働きである。人類は此等の微菌の爲めに、日々夜々蠶食せられつゝある。吾人は寸分時の休憩もなく、一生を通して彼等と悲惨なる戦闘を續けねばならぬ。吾々の祖先も之が爲めに斃れ、吾々の同胞も之



が爲めに殺された。否吾々も亦吾々の子孫も將來之が爲めに斃さるゝかも知れぬ。嗟、微菌は實に恐るべき人類の強敵である。若し此世に此惡むべき微菌がなかつたなら、人類は之に増した幸福はないかも知れぬ。併し一步退いて考へて見ると、此の世の中にバクテリアが無かつたならばどうであらう。吾人が日常生活の上に於てバクテリアの恩恵を蒙りつてゐることも莫大である。乃ちかの味噌、醬油、酒の如きバクテリアの御蔭である。糞もバクテリアである。更に此バクテリアは物を腐らす力がある。此力は非常に人類に害をなすものであるが、又一方から見ると此作用があるが爲めに非常に吾々に益をなしてゐるのである。人間は勿論一切の生物が死んでしまへば悉く腐るが、之れも即ちバクテリア

の方である。若しバクテリアがなかつたなら、世界は死屍累々山をなして住むに堪へないかも知れぬ。

## ▲死も亦芽出たし

佐田介石師が曾て薩州公に面會した。其時公から何が一番お芽出度かとのお尋があつた。介石師は早速「死」と云ふことが一番お芽出度と答へた。處が大邊御不興であつた。元來公は平素に於ても死と云ふことが大嫌で「し」と云ふ音のものは何でも嫌はれた位であるから、佐田師の突飛の答に對して不機嫌であつたのは尤もなことである。佐田師は公の様子を見て取つて、あなたは「死」と云ふことが御嫌ひの様であるが、此死と云ふことがあればこそあなたも今日殿様になられたのであります。若し御祖先以來何



方様もお死に遊ばさないで今迄生きてゐられたなら、いくらあなた  
 が御長男でも、とても島津家の殿様にはなれないであらう。失禮ながら  
 草履取にもなれないかも知れぬ。幸に祖先が段々と死んで下さつた御蔭で、  
 あなたが殿様になることが出来たのであります。それ故「死」と云ふことは  
 忌むべきものではなくて、お芽出度ものでありますと申された。かくの如く  
 徹菌にせよ死と云ふ事にせよ、人類に取りては非常に不幸事であるが、  
 見方によればそれが決して悪でもなく不幸事でもない。されば一概に徹菌を恐  
 れ死を忌みて、只管死を免れんと汲々たるは吾人の取らざる所である。  
 佐田師の答へは確かに此妄執を打破せんが爲め、故らにかゝる答をしたものであらふ。  
 されば世人が見て以て善とし惡と

し、或は幸と云ひ不幸と云ふものは、極めて表面的の觀察で、ほんの  
 一時的のもの、御都合主義のものであつて、決して根本的のものではない  
 ことが分る。かゝる見地に立つて或は世を悲觀し、或は樂觀するの  
 は共に不徹底を免れない。

▲信仰眼に映れる世界

吾々は自己のさゝやかなる見解や、矛盾多き獨斷をなげすて、  
 宗教的信念と云ふ背景に立つて人生を眺めて見なければならぬ。かく  
 すると吾人が世界觀も人生觀も著しき相違あることを發見せざるを得ない。  
 嘗て善と思ひ美と解し、正と思ひ直と考へたところが、今では善でもなく  
 美でもなく、正でもなく直でもないことに氣付くのである。之に反して嘗て惡  
 と思ひ醜と觀じ、邪と思ひ曲



と考へたことが、それ程に悪とも醜とも不正とも曲とも思はない様になつて来る。換言せば吾々は以前は善悪美醜、正邪、曲直、幸不幸、吉凶、禍福等に付て、兩者の間に區別を立つることがあまりに甚しかつた。兩者の間に絶對的差別があるかの様に考へてゐたが、一度宗教的信念の背景の上に立つて眺むると善と云ひ悪と云ひ、幸と云ひ不幸と云ふも、決して絶對性のものでなくして、唯相對的の區別である。否動もすると世人が判斷して、吉凶禍福となすものは、却つて正反對の物を指しつゝあることに氣付かるゝことがある。かの蓮月尼が

宿かさぬ人のつらさをなさけにて

おぼる月夜の花の下臥。

と云つた様な味ひは、相對界以上の深い處に、その根柢を根ざしてゐるのである。換言せば宗教的信念を背景として眺めたる人の人生觀である。

▲徹底したる眞の樂觀

往昔釋尊は「チュンダ」の供物を受けて腹痛を起され、それが原因となつて涅槃に入られた。併し釋尊は「チュンダ」の供養を以つて、何人の供養よりも優つてゐると述べられて、却て彼に感謝せられた。親鸞聖人は罪なくして、越後に配所の月を眺められた。然れども少しも怨嗟の御様子もなく、却て之を以て満足に思はれた。

祖師聖人若し流刑に處せられ玉はずんば、我れ亦配處に赴かんや。我亦配處に赴かずんば、何によりてか邊僻の群類を化せん。



之れ皆師教の恩致なり

と感謝せられた。此の如く常人が見て以つて非常事となし、堪ふべからざることゝなすことにて、少しの苦痛とも障碍ともならず、逆境に處して益々麗はしき情緒の發露を見るは、全く相對界の見地を離れて、宗教的信念を背景として立たれ得るからである。吾人は日常生活に於て吉凶禍福、善惡正邪殆んど應接に暇がない。然れども此宗教的信念を背景として之を眺めたなら、吉凶禍福其物に捉へられずして、更に其物を通して我心に慰藉を與ふるものあるを發見するのである。此立脚地から眺めて見れば、人生々活の一々が樂觀すべきものとなる。かゝる樂觀こそ眞に徹底せる樂觀て吾人の冀望すべきものである。

### 心の富

#### ▲富に三等あり

平安城の人、竹風山人の言に、  
凡そ富に三等あり。第宅宏麗、資財殷充なるは家の富なり。四體康健、耳目聰明なるは身の富なり。深く物理に通じ、廣く古今を識るは心の富なり。三者得て兼ねずんば、將に何をか取らんとする。家の富は身の富に如かず。身の富は心の富に如かず。故に顔子は其樂を改めず。莊周、犧牛とならんことを畏れたり。世俗、唯家を尙びて、未だ嘗て身心の上に論及せず。故に貧士は其樂を知らざる者あり。



と。貝原益軒が『慎思録』の中に此言を引いて、「富に三等あること、これ前人の未だ言はざる所、好議論と謂ふべきなり。」と評してゐる。如何にも評言の通である。世の人が日々汲々として働いてゐるのは、何の爲であるかと云へば、只彼の物質上の富乃ち家の富を得んが爲である。身の富や心の富はにおいて省みないのである。

▲家の富

吾人が生活する上に於て、家の富は必要にして缺く可らざるものである。吾人は裸體であるとは出来ない。乃ち衣服の必要起るのである。吾人は住居なしに生活することは出来ない。乃ち邸宅を要する所以である。更に吾人は食はなければならぬ、乃

ち食物を要する。此衣食住の三者は、吾等がよつて以て生活する要具なれば、何人も之を無視することは出来ない。併しながら、莊麗なる邸宅を構へ、華奢なる衣服を纏ひ、美酒佳肴の慾を恣にするを以て、人間の理想となし、之を以て人事終れりとなす人があつたならば、その人は未だ以て人生を解し得たりと稱することは出来ない。

▲身の富

衣食住の富は必要に相違ない。併し之が唯一の富ではない。裸一貫でも健全な體を以て大に働くことの出来るものは、又以て一の富を享有するものと云はざるを得ない。乃ち吾人は、吾人の健康そのものが、無形の富なることを知らなければならぬ。多



くの人には自分の健康と云ふことが、非常の幸福であることに氣付かないものがある。自分が一度でも大病の経験を有するものは、健康の幸福であると言ふことを理解するが、左程でもない人はそんなに健康が幸福であるとは思はない。かゝる人は他人の病氣に對しても、心からの同情を寄することが出来ない。自分に病氣に惱んだ人程病人に對する同情が深いのは、それ丈健康のありがたい事が知れてゐるからである。英國のゴールドン將軍は常に其健康を喜んで、之を朝夕天帝に謝したと云ふことであるが、如何にも健康の價値を認めただからである。健康は實に無形の富である。「命あつての物種」と云ふ諺は此意味を最も平易に説明したものである。孟子が「父母共に存し、兄弟故なきは一の樂なり。」と

云つて、父母兄弟の無事健全なるを三樂の一に數へたのも、健康の幸福を認めただからである。竹風山人が四體康健、耳目聰明なるのを身の富と名けたのも蓋し故あるかなである。

#### ▲心の富

併しながら、吾人の富の内、一番大切なるものは家の富でもなく身の富でもない、只かの心の富である。如何に巨萬の富を蓄へ、物質上の満足が得られても、又如何に體が丈夫で身體上の苦痛がないにしても、只それ丈では人間としての生活は、餘りに單調である。否、餘りに動物的である。吾人は肉體と共に心靈を有してゐる。肉體が衣食住によつて養はれねばならぬ如く、又心も無形の衣食住に養はれなければならぬ、乃ち心の富を要する所以である。



近縣のある學校の生徒が、東京見物に上つてある富豪の邸内を見物したことがある。その時邸内に犬の棲居の爲に特にしつらへたる小屋があつた。設備の完備せることが普通人の住居以上であつた。生徒の一行に加はつてゐた校僕が、たま／＼此犬小屋を見て痛く感心し、茫然として佇んでゐた。一行はその儘其處を立去つたが、軀て小使の居ないのに氣付き、校僕はどうした。」と一人が云へば、他の一人が「確か犬小屋の處に立つてゐた筈だ。」と云ふ。早速引きかへして見ると、恰も釘付にてもせられたやうに元の儘で立つてゐる。「おい何うしたのだ。」と肩を打たれて始めて我に歸つたが、長大息を漏らしつゝ語つて曰く。

「私程つまらないものはない。五十の坂を越える今日迄、此犬め

も劣つた日送をしてゐるかと思ふと情なくてたまらない。もう此世に生きてゐるのも厭になりました。」

とさも力なく語つたので、他の人々も驚いて、色々に慰めて漸く連れて歸つたと云ふことである。若し人間が衣食住の富を以て其の價値を定めらるゝものであつたならば、此の校僕はたしかに、かの犬にだも及ばないと云はねばならぬ。併し人間の價値はそんな物質上の富にあるのではなくして、遙かに之を超越した所になくしてはならぬ。ミルの言に

『吾人は豚となりて満足なるよりは、人となりて不満足なるに加はず。痴人となりて満足なるよりは、ソクラテースとなりて不満足なるが勝れり。』



と云ふのがあるが、這間の消息を漏したものである。

昔亞歷山大王が希臘の賢者ダイオセニスを訪問した時に、ダイオセニスは桶の中に寢起をしてゐたと云ふことである。而も大王をして、我れ亞歷山大王たらずんば、ダイオセニスタらんと嘆賞せしめしは、全くダイオセニスの人格の上に偉大な所があつたからである。孔子が顔回を評して『一簞食一瓢飲在陋巷、人不堪其憂、回不改其樂、賢哉回也。』と賞せられたのも、實に此點にあるのである。是に至ると人間の價値を定むるものは、家の富にもあらず、身の富にもあらずして心の富である。然らば吾人は此心の富を養うて、最も幸福なる生活に入り、最も高尚なる人格を作る様に心掛たいものである。

#### ▲心の富と宗教

然らばその心の富を養ふには如何にせば可なるか。竹風山人は深く物理に通じ、廣く古今を識ることを以て心の富を作る方法としてゐるようであるが、予は思ふに心の富を養ふには三方法があると思ふ。即ち道德によるものと、學術によるものと、宗教によるものと之である。三者何れも心の富を作るに必要なるものなれども、最も一般的で、而も一番力あるものは宗教の力である。倫理道德を全うして行くことは、大變に必要なることであり、又人格の向上を來すものであるが、宗教を離れたる倫理道德は根底なき行爲であつて、徹底したる行爲と云ふことは出來難い。學問も、ある一部の人を満足せしめ得るかも知れぬが、平時に於ける場合に於



て然るのみで、一旦人生の悲惨なる境遇に遭遇すると、存外あてにならぬ薄弱なるものである。茲に至ると最も力強く根本的なるは獨宗教の力である。吾人はかの火災の際に、婦人が力以上の重い箆筒長持を抱へ出したと同じ様に、人生の逆境に遭遇せる人が、宗教の力によつて、普通の人の到底堪へ得ない苦境に於て、よく健闘を續けていつた幾多の事例を耳にするのである。若し此世に宗教がなかつたなら、人生は如何に殺風景で、またいかに生活に堪へられないであらう。

## ▲伊藤氏の先代

播州の伊藤長次郎氏の先代に就て聞いた話がある。只今の長次郎氏の父に當らるゝ人の弱年の頃の話である。當時伊藤家に

は不幸續で、上からくと段々と子供が病死し、遂に長次郎氏の父上がたつた一人残されてしまつた。其も病身でいつ何時死ぬる様なことがあるかも知れないので、出入の者どもは大に心を痛めてゐた。ある時一人の出入の者が、伊藤家に參つて、先代に面會して申上ぐるに、

「お家には段々御不幸が續いて、上からく皆様がお亡くなりになつて、今は只あなた御一人となられた。此上貴下の御身の上にもしもの事があつたらそれこそ一大事である。あなた御一人の不仕合は勿論のこと、お家も斷滅しなければならぬ。若しそうなると御先祖に對しても申譯なき次第であります。就ては、御宅の座敷の後にあります雪隠が、鬼門に當つてありますので、あれをお



取拂になつたら宜しう御座いませう。」

忠實らしく便所の取拂を交渉した。普通の人ならばこんな時キツト心が迷ふに違ないが、長次郎氏の先代はなか／＼そんな自信のない人ではなかつた。乃ち出入の者に向つて、其親切を一應謝して、然る後断然と其要求を拒絶せられた。

「我が内は代々真宗の家柄である。之は伊藤家の家憲であるから變更は出来ない。真宗の教る所は、一切の迷信を許さないものである。日柄方向を撰ばないのであるから、そんなことに頓着する必要はない。否、決してしてはならない。又よし汝の言を用ゐて便所を取り拂つて五十年三十年長命であつたとて、何の面目あつて祖先に地下に合する顔があらう。まして死後永切の大問題を

踏み誤まる様なことになつては、折角真宗の家に生れた所詮がなくなるではないか。我は汝の言を用ゐない爲に、例ひ天死して、伊藤家は断絶しても、寧ろやらない方が祖先に對しても申譯がある道理である。況んや永切の問題おやである。汝の言は親切なれど之に従ふことは出来ない。」

断然と之を拒絶した。出入の者も其餘りに頑固なるに驚いて、如何にも真宗と云ふ宗旨は頑固な御宗旨でありますと評したさうである。所が不思議にも別に變つた事も起らず、家運も段々よくなつて、遂に先代の死なる、頃には、千二百町の田地を有する大長者となられたさうである。初先代が家督を繼いだ頃には、六十町許りの田地しかなかつたのであるが、一代の内に二十倍の財産



を作られたのは驚くべき大發展である。先代が死に臨んで遺言して、一かの座敷の便所は我屋の寶であるから、決して取除けてはならない。」と申されたさうである。誠に趣味深いお話である。伊藤氏の如きは三つの富の内家の富と身の富とは、究竟の依處でないと言ふ事を、信仰によりて知らして貰はれたので、心の富を全うする爲には家の富と身の富とを顧みられなかつたのである。然るに一度此確乎たる信念に住して心の富の充實を得られた結果、家の富も身の富も之に附隨して、期せざるに三富を全うせられたのは偶然といへば偶然であるが、一つは又宗教の信念を以て内容とせる心の富の自然の副産物であります。吾人もどうか宗教的信念の充實を謀つて、心の中には常に温い信念の暖まりを保つ

て、此冷かな風波荒き世路に健闘を續けたいものである。是れ吾の現在と將來とを通じて、生存の根本的基礎であります。

## 無我の生活

### ▲平和なる生活は無我にあり

吾等が日々の生活に於て後々まで心持よく感ずる仕事は何であるか。予は虚心平氣で社會の爲め、他人の爲めに努めた仕事程愉快な心地のするものはなからうと思ふ。換言すれば、私利私慾を離れて他人の爲めにとむる行程貴い行はないと思ふ。こちらに注文をつけて、あゝしてもらはう、かうしてもらはうと、胸に一物もつてやつた行爲は、一時は愉快さうに見へても、真にいつく



までも心地よい行となることは出来ぬ。又かやうな行爲は、若しこちらの注文通りになはないと、却つて先方を怨み不平をこぼして、折角の善い行爲も我が仇となることがある。世には慈善とか博愛とか云ふ名義の下にいろく働いてゐる人がある。又、社會とか人道とか云ふ名の下に、奮闘してゐる人も少なくない。併し此等の人々にして眞に何等求むる處なく、虚心平氣に其目的の爲めに働く人々であつたなら、國家の幸福此上もないことであるが、若し不幸にして、何等か利己の爲めに求むるところありてやる行としたならば、國家や社會は非常な不幸を見なければならぬのである。此虚心平氣、何等求むところなき行爲は即ち佛教ていふ無我の狀態である。吾等は此狀態に歸して、平安の生活に入る

ことが尤も必要なのである。

#### ▲完全なる利他も無我にあり

元來吾等の本性には、「己れが」と云ふ性質がある。乃ち自分の爲めに私利私慾を計る性質がある。加藤博士は此點にのみ重きを置いて利己主義と云ふことを主張せらるゝ様であるけれども、又一面から見ると、自分と云ふ觀念を離れて、人の爲めに盡すと云ふ利他の性質をも本來具有してゐるものである。孟子の所謂慷慨測隱の心は誰れ人も有するもので、佛教で一切衆生悉有佛性と申すのも亦之である。併し、此現實の我等に、利己心と利他性と、何れが勢力を占めつゝあるかと云へば、無論利己心である。若し假に兩者を公平に發達せしむる必要があるとしても、吾等は特



に利他心の發達を鼓吹しなければならぬ。何んとなれば利己心は、吾等が特更に力を強めて主張しなくとも相應に發達しつゝあるからである。況んや利他を外にして眞正なる利己はあり得べからざるをやである。而して完全なる利他は乃ち無私の行爲に於て始めて現はれる事が出来る。吾等の日常の實際的方面から考へても無我と云ふことがなかつたなら何事も立派に成立しない。親が子供を育てるにも、無我に住して始めて立派な愛情の露はれを見る事が出来る。軍人が君に忠義をするにも、此無我に住して始めて眞正なる犠牲的行爲が表はれるのである。又教育家が教育を施すにも、此無私の見地に立つて始めて教育家の資性を備ふる事が出来るのである。殊に宗教家が布教傳道をなすが如

き、最も此精神の必要を感じるのである。其他、醫者であれ、商人であれ、一家の主婦であれ、一軒の番頭であれ、皆此心を有せなければ完全に職務を果すことは出来ないのである。

#### ▲我執我慢は自損の基

試みに我等の五官に付て見よ。眼、耳、鼻、舌、身が互に無我に住して始めて吾等の活動が出来るのではないか。耳は耳、目は目、乃至手足は手足と、若し之れ等が別々に私利私慾の奴隸となりて、勝手に振舞つたらどうであるか。耳も、目も、鼻も、舌も、手足も、一日も安んずることは出来ないである。例へば目に疾病があつた場合に、足はその爲めに醫師に行くの勞を取り、口は口上を述べる役をとめる。耳は醫者の注意を聞き取る役をなし、手は薬を持ち歸る



役に當る。かくして眼一つの病氣の爲めに、凡ての機能が働いて之を助けるのである。若し眼が病んだとき、他の機官が反對して、眼は眼自身で病院に行けばよい、自分で口上も述べればよい、吾々は眼一個の爲めに使役せらるゝはいやだ、なんて不平を訴へたらどうであらう。困るものは眼獨でせうか。やがては五官が皆其の影響を蒙るてはないか。併し、五官は何れも無我の立場に住して、各々其天職を盡すから、一人の立派な活動が出来ることになります。若し之を一家の内に就て例へたなら、主人は頭であり、妻子は手足である。之が互に無我になつて始めて一家が圓滿に活動する。若しそれ軍隊の上でいへば、天皇陛下は頭であつて、軍人は手足である。之が互に無我に住して完全なる軍隊が出来ると

のである。此の如く無我は吾々生活の上に於て、何れの方面から見ても大切であるが、實際の吾々の行動に於て、果して無我の状態になつてゐるかどうかと云ふことを顧みると、なか／＼覺束ない感がする。たとひ一時は無我の状態になつても、それが長つゞきがない。永久に變らざる状態にあることが出来ん。これが出る様になつたなら、本當の活動も出来ると同時に、胸中平安なる生活を送ることが出来る。併し之には大に修養や工夫の效を積まなければならぬ。

## ▲白隠禪師の無我

白隠禪師と云ふ方は禪宗の大徳であるが、此方に有名なる逸話が傳へられてある。曾て禪師がある村に錫を留めてゐられた頃、



門前に豆腐屋があつた。所がその豆腐屋の一人娘が、いつの間にかお腹が太くなつたので、両親は驚いて厳しく詮議した。娘は一策を案じて、「之は白隠さんのお子であります」と答へた。両親は其意外に驚き、早速禪師を訪ふて其不法破戒を詰つた。禪師少しも驚かず、只「さうであつたか」と言つて、更に辯解せらるゝ模様もなかつた。間もなく子供が生れた。亭主は早速禪師の下に至つて子供を引渡した。禪師は別に當惑の色もなく、之を引受けられた。之より毎日村から村里から里へ子供を懐きながら乳をもらつて歩かれた。之を見聞せる村々の者は、口々にきたなく禪師を罵言した。さしもに一時高かつた禪師の道譽も、とんと消えてしまつた。此様子を見てゐた娘は今は却てたまらなくなつた。自分

故に禪師に非常なる迷惑をかけて、すまなかつたとありのまゝを  
自白した。父は大に驚いて直に禪師に面會して平に謝りて子供  
を引き取つた。禪師は咎むる所なく、只「さうであつたか」と言つて  
子供を渡した。このことが再び村中に知らるゝ様になると、今迄  
の反動として禪師の名聲は以前に増して高くなつた。私は此禪  
師の態度を見て、始終一貫せる無私の行動に感服せざるを得ない。  
吾等でも、始め亭主の怒鳴り込んだ時位は、禪師の眞似位が或は出  
來たかも知れぬが、もう子供を推しつけられたときになつては、な  
かゝ我慢は出來ない。或は自分の名譽に關するから、厭くまで  
争ふとか、或は之を育てる義務はないとか、何とか理屈をつけて大  
に争つたに相違ない。よし、黙つて受取つたにした處で、後々心中の



平なる事は出来ぬ。我子てさへ少し自分の意にかなはなければ、里子にても遺つてしまはふかなど云ふのが多くの人情であるのに、人の子——しかも濕衣を着せられて、あられもない評判を取つたもの——を、不平なしに心から慈愛心に驅られて育てるなどは、眞似事でも出来はしない。況んや虚心平氣て之をなすおやである。是に至つて禪師の大なる處を見るのである。更に最後の亭主が子供を受取に來たときなど、私ならば「それ見よ」と、必ず一言云つてやりたい處であるか、禪師は只「さうであつたか」と、少しも不足らしい様子もなく、快く子供を渡されたと云ふ點は、如何にも男らしい。凡調を解脱した風が見える、此の如くにして始めて始終ある無私の行爲と見ることが出来る。

▲無我と修養

世間普通の倫理の立場から申せば、禪師の態度は常規を逸してゐるかも知れない。或は之を以て馬鹿正直の人の行ふ事の様に見做す人があるかも知れない。併し禪師の書かれたものを伺ふと、其修養のよつて來るところが略ぼ察せらるゝのである。

衆生本來佛なり

氷と水の如くにて

水を離れて氷なく

衆生の外に佛なし

衆生遠きに求むれど

近きを知らぬ愚さよ

たとへば水の中にゐて

渴を求むる如くなり

長者の家の子となりて

貪里に迷ふに異ならず

六種輪廻の因縁は

己れが愚癡の闇路なり



闇路に闇路をふみそいて つか生死を離るべき。然るに無明煩惱に吾等も元來は佛性を有してゐる者である。惱の愚癡に蔽はれて、自己の本性を發揮することが出来なくなつて闇から闇へ迷ふのである。此愚癡を無くして無我の境に入れば、自然に佛性の光を見出すことが出来ます。禪師の如きは實に此境に體達せられた方である。併し私共は、禪師が體達せられたと同じ方法で、其境に達することが出来ませうか。之れは人々の根氣の利鈍にあることなれば、あながち此方法によらねばならぬと限つた譯ではない。宏漠たる一代佛敎も、歸するところは無我の二字にあれば、自分、自分に適した達し易き方法を取つて進むことが肝要である。今各宗を通覽するに、何れも無我を説かざる宗

旨は殆んどないと云つてもよいが、果して無我に體達することが出来るか疑はしい。「衆生本來佛なり」と喝破せられた禪僧の見識も、後の徒弟をしては、却て我慢我執の種子となつた嫌はないか。無我になれ〜と云ふ宗旨が、却て我慢我執に陥つてはゐないか。無我になれ〜と云ふその努力が、已に有我ではないか。深夜眠れない人が、もういろ〜な事は考へまい。直ちに眠らうと、つとむれば勤むる程、眠られなくなると同じ道理である。獨り絶對他力の御敎に於ては、敢て無我を要求しない。有我の儘、我慢我執の儘、佛力に乗るのであるが、そが、やがて無我の境に達する趣のあるのは、誠に摩訶不思議の感がする。

## ▲他力敎と無我



ある童話にこんな話がある。或時日の神と風の神と力競べをした。それが丁度冬の時侯で、なか／＼寒さの厳しい日であつた。遙かに下界には旅人がマント、頸巻に身を固めて、如何にも寒むさうに歩いてゐる。日の神曰く、「どうです、貴下の力であの旅人のマントを脱がして御覽ん」と風の神に云ひますと、風の神は、「その位のことはお易いことです」と答へて、急に疾風を起して旅人を吹きつけた。旅人は必死となつてマントを引きしめた。そして、風が吹けば吹く程小さくなつて、防禦してゐる。それを見てゐた日の神は、「お手並拜見しました。こん度は私の手並を御覽なさい」と云つて急に姿を顯はし、赫々と照りつけた。さあたまらない。今まで必死でマントにかがりついてゐた旅人も、今度は急に熱く

なつたから汗をたらたらと流して、マントも頸巻も皆取つてしまつて、シャツ一枚となつてしまつた。

之れは小供のお伽話であるが、なか／＼趣味ある話と思ふ。無我になれ／＼と各宗で勤むる處は、恰も風神が壓迫的に旅人のマントを取らしめんとすると同様である。我慢、我執の取れないのも無理はない。之れに反してかの暖かい日光は、何等要求するところなく、只その慈愛の光を以て旅人に接し、不知／＼の裡にマントも頸巻も脱がしめたのは、恰も何等の要求もない絶對他力の御慈悲が、吾々の凡心に届いた刹那、我慢のマントも、我執の上衣も取り去らずにはゐられないのと同様である。之れ我眞宗が無我を求めずして無我に入る味である。蓮如上人が御一代聞書に、



總體人には、をとるまじきと思ふ心あり。此心にて世間には物をしならふなり。佛法には無我にて候へば、人にまけて信をとるべきなり。理をみて情を折るこそ佛の御慈悲よと仰せられ候。

又歎異鈔の御文には、

わろからんにつけても、いよく願力をあほぎまいらせば、自然のことはりにて、柔和忍辱のこゝろもいてくべし。

と仰せられたのは全く此味ひである。私共は自己の罪惡を觀じ、無常を觀じて、佛の誓願に信順して、佛の御慈悲が眞に心に届いたなら、自然の御計にて、無我の行に一致さして貰ふことが出来る。故網島梁川氏が、此最後の御文を見て、「無修養の修養」、「没工夫の工夫」と嘆賞せられたさうであるが、基督教界に籍を置かれてゐた氏にして、此言あるを思へば、此御文の尊き事を今更の如く感ずると共に、宿善の有難さをも感ずるのである。私は皆さんと共に、此味ひを味うて、無我の日送りをなさんことを望むのである。

### 教育家としての釋尊

#### ▲教育家の資格

宗教と教育とは別物である。従つて宗教家必ずしも教育家でない。教育家亦必ずしも宗教家でない。併しながら教育家に宗教の素養が必要なるが如く、宗教家にも亦教育家たるの資性を要するのである。釋尊が世界の大宗宗教家として成功せられた



のも亦此の大教育家の資性が與つて力あるのである。元來教育者には必要なる資性が四つある。第一は豊富なる智識、第二は慈愛の精神、第三崇高なる人格、第四教術を活用する才能之である。如何に豊富なる學識を有する人でも、慈愛に富める精神がなかつたなら、其學識も遂に人に及ぼす事が出来ない。又豊富なる知識と慈愛の精神とがあつても、其人の人格が下劣であつたなら、教育家として偉大なる感化を與へることは出来ない。更に其知識と慈愛と人格とを兼ね備ふるも、所謂教授の理法を心得なかつたなら、未だ完全なる教育家と云ひ得ることは出来ない。此の四つのものは教育者の資格として缺く可らざるものである。此點に關してマツチアス氏は三種の教師を擧げてゐる。第一は先天的教

育家で、生れながらに教師たる性を有するもの。第二は機械的教育家で、教術の形式的方法にのみ拘泥するもの。第三は模範的教育家で、人格も高ければ又教術の活用も巧みて兩者の一方に偏重しない頗る圓滿完全な教育家である。

▲豊富なる智識

今釋尊は其資性に於て、如何程の特徴を有せられしか。第一豊富なる智識の點は、何人と雖も異論を狭む餘地はなからう。釋尊が八歳の頃より毗奢婆密多羅に就て婆羅門の學を修め、驢提提婆に付て武藝を學び、少年の頃、已に文武兩道の達人として、同族の者を驚かされたことが傳へられて居る。其の成道の後、あらゆる階級の人に向つて法を説かれたが、所謂對機説法で縦横自在、如何なる



學者も悉く釋尊の説に服さないものはなかつたのを見ても、其の學殖の豊富なりしことが察せられる。凡そ古來の大宗教育家と呼ばれ大教育家と呼ばれるゝもので、釋尊程識見の高い、學殖の深いものは、先づ無いと云うても過言ではあるまい。釋尊の説法が基督のそれと違つて、理路整然、奇を衒はず、情に走らず、淳々として倦まざるところ、誠に其の奥底のいや深き感がする。大なるピラミッドは其のベースが廣大でなくてはならない如く、大なる宗教家、大なる教育家は、大なる學識のベースの上に立たなければならぬ。

▲慈愛の精神

第二、慈愛の精神は、釋尊の御一生涯を通じて、到るところに溢れてゐる。凡そ慈眼視衆生と云ふことは、教育家としてもまた必要

である。此精神がなかつたなら、教育も畢竟死智を授くるに過ぎない。此の點に於て釋尊は又大なる教育家の資格がある。釋尊が出家の動機は元より自分の出離解脱の精神に外ならなかつたのであるが、六年の苦行の後、菩提樹下に正覺を成就せられし以來、所謂利他の大行に向つてその生涯を捧げられたのである。初め菩提樹下に正覺を生ぜらるゝや否や、自らそのまゝ涅槃に入らんかとも考へられたが、更に考へ直して、是非此の廣大なる佛道を一切衆生に施して、快樂安穩に至らしめんと云ふ大慈悲心に驅られて、其の大獅子吼を續けられたのである。而して其の初めに向はれたのが阿若矯陳如等五人の處である。云はゞ彼等は釋尊の不甲斐なきを怨んで見捨てた輩である。此の憐むべき御弟子を先



づ濟度せられたのが佛の大慈悲である。又其の最後に將に涅槃に入られんとする前に、クシナガラ城の一老哲學者須婆陀羅が御伺ひした時の如きも、阿難等が佛の臨終を煩はさんことを恐れて面謁を謝絶したが、佛はこれを聞いて、直ちに枕邊に呼びよせられて、四諦八正道の法を説かれた。流石の老學究も、釋尊の所説を聞いて最後の御弟子となつたのである。殊に吾人の感に堪へないのは、チュンダに對する御傳言である。佛はチュンダの供養を受けられて以來、病が重きをなして遂に涅槃に入らるゝ様になつたのであるから、聖人がチュンダの供養が害を與へたのではなきかと疑つて居たので、チュンダ自分も大に惑ふ所があつたのである。佛は之を察して阿難に囑して左の如く言はせしめ給うた。

我れ涅槃に入りし後は、我が言として之をチュンダに傳へよ。彼は佛陀に最後の供養をなすの榮を得たるが故に、來世に於て善報を受くべし。我一生の受けたる供養の中に最も勝れたるもの二つあり。佛地に達せんとする前にチャイターの捧げたる供養と、最後にチュンダより受けたるもの之なりと、之によりても、如何に釋尊が一切のものに向つて慈愛の精神に充ちく玉ひしかを察することが出来る。此の精神は實に大教育家としての大なる資性の一つであるまいか。

#### ▲崇高なる人格

第三、崇高なる人格と云ふことに付いても、恐らく何人も異論はあ  
るまい。釋尊の感化力の偉大なるは、その學殖、その慈腸、その能才



に依るとは云へ、氣高き人格の力がなかつたなら、此の如き感化を  
與ふることは出來ない。釋尊が始めて正覺を成就せられて、之よ  
り鹿野苑に向はんとせられし時、彼の梵士優婆迦にお出逢ひなさ  
れたとき、佛の相好圓滿なるお姿を拜して、誰人に付いてかくも美  
しき満足の相好を得玉ひつると御尋ね申し上げたのを見ても、一  
見光顔巍巍たる御様子が分る。かの九百九十九人を殺害したる  
惡黨の鴛掘摩羅てさへ、釋尊の御姿を拜しては刀を投じて御弟子  
とならざるを得なかつた。否、只に人間のみでない、獸類てさへ  
釋尊の人格には畏服したのである。ある時提婆が阿闍世王と共  
に佛を殺害せんとて、醉象を放つて釋尊を襲はしめたことがある。  
その時、かの象は釋尊を見て畏縮して、遂に害を加ふることをしな

かつた。凡そ是等のこと一として釋尊の人格の氣高かゝりしこ  
とを説明するの材料たらざるものはない。更にそのお弟子に至  
つても、人格の氣高き者が少なくなかつた。舍利弗、目犍連の兩人  
が師を求めつゝあるとき、一日舍利弗、佛子阿説示の行乞するに遇  
ひ、其の容の温乎として、苦惱の痕なきを觀、其の師の誰なるかを問  
うて、初めて佛のあるを知つて、二百五十の弟子をつれて佛の教團  
に入つた事實もある。斯の如くお弟子方に至る迄、圓滿なる人格  
を養ひ得られたのは、全く釋尊の人格の然らしめたのである。げ  
に釋尊は偉大なる人格である。其の感化力が惡黨や禽獸にまで  
及びし處、實に千古の師表である。

## ▲教術の才能



第四、教術に對する才能に至つても、世の所謂大教育者が容易に企て及ぶ可らざる處がある。釋尊は今の所謂教育の理法を御承知の筈はない。併し其先天的本能は、大教育者の資格を十二分に備へてゐられた。釋尊の説法は、一々條理整然として一絲亂れない。或は分解法を用ひ或は總合法を用ひ、時には五段教授的の順序を用ひて、人をしてよく條理を悟らしめた。一言ていへば釋尊の説法は、應病與藥的である。對機によりて法を説かれた。時には形式によつて之を説かれ、時には實際に付いて之を述べられて縦横自在である。必ずしも形式によらない。又必ずしも之を無視しない。よく中庸を得てゐる。其の尸迦羅に對して六方禮拜の意義をお示しなされた如く、或は玉耶婦人に玉耶經をお説きな

された如く、時には向ふの説に従つて法を説き、時には對機の考を排して自説を述べらるゝなど、緩急極めて自在である。殊に吾人の感ずるのは、興味と云ふ點である。かのヘルバルト一派が興味を以て教育の主要點とした如く、興味を起さしむると云ふことが教育上缺く可らざることである。釋尊の自在なる辯説は聽者の精神を興奮し刺戟し、多大の興味を起さしめしことは非常なものである。經文の終りを見ると、何れも一歡喜作禮而去としてある。之れ決して修飾ではない。眞に聽者をして感動せしめた事實である。蓋し釋尊の如き學殖のある氣高い人格で、而も辯説の爽かなるものあるに於ては、興味は必然的に湧いたに相違ない。かの國民が吾れも一と競うて、教團に入らんことを申込んだの



も、ヘルバルトの所謂追求的興味に驅られたのであらう。

#### ▲模範的大教育家

最後に予は之に附隨して申して置きたいのは釋尊の説法は理論が主でなくて、實際的であつたと云ふことである。換言すれば釋尊は實行の人であつた。自ら行ひ自ら信ずるところを人に示されたまで、ある。釋尊の教理と釋尊そのものが決して別物でなかつた。教理を體現したものが乃ち釋尊であつた。之れその一言一行が、非常なる感化と力とを與へた所以であらう。かの所謂真正なる教育は、説明にあらざして實例にありと云ふのは此事である。此點に於て釋尊は千古の大教育家であると云ふも過言ではあるまい。要するに釋尊は大宗教育家であつて又同時に大

教育家である。其豊富なる學識其仁慈なる精神其氣高き人格乃至其の教術の才能一として備はらざるものはない。若し之を評すればかのマツチアスの所謂第一種の先天的教育者で而も第三種の模範的教育者を兼ね合せたものであらう。

## 反省と修養

#### ▲積極と消極の修養

修養の道はいろ／＼ある。人の長所を見て之を真似ると云ふことも確かにその一つであるが、人の短所を見て我身を反省することも缺くべからざることである。前者を積極的修養とすれば、後者は消極的修養である。吾人の接する周囲の事物は、悉くの物が



皆吾々を善導し扶掖するものではない。勿論或物は非常なる教訓を與へて吾々に積極的に善事を勧めるものがあるけれども、反對に或物は我々に非常なる悪事の暗示を與へるものも少なくない、否寧ろ悪事の暗示となるものが或は多いかと思はれる。是に於てか吾々は反省的修養法の忽にすべからざるものあるを感ずる。

俗に「人のふり見て我ふり直せ」と云ふ諺は、吾々の耳なれた諺である。又「前車の覆へるを見て後車の誠めとなせ」と云ふこともよく聞く格言である。併し此等の諺や格言が果して何程の權威を修養の上に現はしつゝあるか頗る疑はしい點である。極めて卑近な例であるが汽車などで旅行をしてゐる様なときは、煤烟で頭

の中も鼻の穴も眞つ黒くなるものである。かゝる際に人あり、失禮ですが、あなたの顔に煤烟がついてゐますと云ふと、傍にゐる他の一人が「私はどうですか？」とすぐ自分の身の上のことを尋ねるのである。かゝる皮想上の事になると存外人のふり見て我ふり直せの諺が有効に行はれつゝあるが、道德上の行爲の問題となると却つて意外の現象を發見するのである。

#### ▲人の悪事は我辯護

人の悪事を見聞した場合に、直ちに之を以て吾か反省の資料となし、修養上に貢獻せしむるところがなくてはならぬ。然るに實際多くの人の爲す處を見るに、事實は之に反してゐる。或ものは他人の悪事を見聞して對岸の火災視し、極めて冷淡に看過してゐる。



るものもある。又或ものは之を以て自己の悪事を辯護する材料となすものがある。甚しきは、あの人てさへか様なことがある。まして吾々のやるのはあたりまへだなどと公言して、自己の罪惡を是認せんとするものすらある。此の如き人々は、恰も人が顔に墨をつけてゐるから、自分もつけてもよいと主張すると同じ道理で、世間此の如き没分曉漢はないと思ふ、此の如くかの諺や格言は、只形式上皮想上に於てのみ有効で、精神的道德的に於て生命が少ないのは甚だ遺憾千萬である。

## ▲不善人は善人の資

老子は「善人は不善人の師なり、不善人は善人の資なり」と云ひ、孔子は「三人行けば必らず我師あり其善なるものを選びては之に

従ひ、其不善なるものは之を改めよ」と云はれたが、古聖か善惡共に取つて以て自己の修養の助とせられた用意の周到なる程を感心せずには居られない。就中老子の言葉の中で不善人は善人の資なりと云ふ意味が頗る味ふべき點と思ふ。善人が凡ての人の手本となり師と仰がるゝのは申すまでもないことであるが、悪人が善人の助けとなり手本となると云ふことは、一寸吾々の理解に苦しむ所である。然るによくよく考へて見ると、不善人が爲すところの行爲の一々が、實は吾々に反省を促すべき好個の資料である、聖人賢人が修養を積んで偉大なる品性を作られたのも、畢竟この反省的の修養が與かつて力あるのである。

併し茲に注意すべきことは、此反省的修養は自己の道德的自覺



が伴はなければならぬ。否、道徳的自覺が起らないと、恐らくは反省と云ふことも行はれないことと思ふ。自分は道徳的に立派なものである、完全なものである、少くとも自分はさしたる罪惡を犯したのではないと感じつゝある間は、只人の缺點のみ見えて、それが少しも自分を益する種とはならない。眞に自分の缺點を自覺しつゝある人にして、始めて善惡ともに我修養の資となるのである。

▲如來様に足を向ける自分

眞宗大谷派の先徳香樹院の所に、日頃懇意なる一人の信者が訪ねて懺悔話をした。「先達て私の處に一人の御舊蹟巡拜者が宿を乞ひました。私は御開山様の御舊蹟を巡拜する程の同行であ

るからと思つて心よく宿を借しました。所が夜分此の同行が佛壇の方に足を向けて休んでゐましたので、今更の如くいまゝしくなつて、此んな人に宿を貸すのではなかつたと、密かに後悔致しました。が、その下より、いやゝさうでない。これは今までの私の姿をお示し下さつたものである。私も口に念佛を唱へ、手に珠數を持つてゐたが、長い間如來様に足をむけてゐた。が今はお蔭で如來様に足を向けること丈はないやうになりましたと思はして頂いた所が、腹立たしい心も消えて、お慈悲を相續さして貰ひましたと申し上げた。すると香樹院が「お前は過去の自分を見せて貰つたものぢや」と喜ばるゝが拙僧はさうは思はん。矢張り只今の私の姿をお示し下されたもの



としか思へない。お前は過去に於て如来様に足を向けたと云はるゝが、拙僧は只今尙ほ如来様に足を向けがちである、と申されたので、信者も始めて自分の考への至らなかつたことに氣がついて、非常に懺悔したと申すことである。同じ一つの事柄に對しても、自覺の程度の深淺によつて感ずる度合に違ひを生ずるのである。不善人は善人の資なりといふ意義は益々味ふべきである。

▲蓮生坊の忍耐

熊谷蓮生坊直實が東國へ下る時、遙か向ふより早馬に乗つて走つて來る一人の武士がゐた。直實は途の傍に腰を下して避けてゐると、馬上の武士は法衣姿の直實を一眇してたん唾を吐きかけ

た。さすがの直實も思はずむつとして怒のこぶしを固めて打ちかゝらうとしたが、急に思ひかへして、ふり上げた手を下すなりお念佛を繰りかへした。此光景を見てゐた武士は、其の意外の態度に驚いて其の理由を尋ねた。すると直實は之の武士が一の谷に於て共に武勇を争ひし友達の宇都宮彌三郎頼綱であつたので、

「あゝ忝けない。昔の友達から斯く蔑視せらるゝ、この蓮生を、阿彌陀如来なればこそ、此の儘お助け下さる忝けなや南無阿彌陀佛

と歡びの念佛となへながら、靜かに頭を垂れて武士の通過を待つて居つた。馬上の頼綱此の態を見て、關東一の強の者熊谷直實がよくも斯くまで變りしものよと、つくづく感じ入り、馬を下りて入



道蓮生に事の有様を尋ねた。熊谷は懇々と、師匠法然上人の教化の尊さを語つたのである。此の後頼綱は兵庫在勝尾寺においての法然上人に謁して他力の法門を聞き、上人の御弟子となつたのである。蓮生坊の忍耐に至ては到底常人のなし能はざる所之が普通道徳のそれよりも宗教の修養が、一層効果の多いものであることをよく示して居る。

▲鬼の念佛

神戸の紳商福間久米吉氏の忠僕に通稱米吉といふ人は、主人の病床に看護しながら終に信仰に入つたのであるが、爾來常に口に念佛を絶たなかつた。或る時米吉が頻りに念佛を稱へて居ると、友人が之を聞いて

「お前の念佛は鬼の佛念だ」

と云うた。米吉は之の言葉に腹も立てず、

「その通り、私は鬼ぢや、かゝる鬼をも厭はぬ佛の御救ひが何よりありがたい。」

と却て感謝したのであつた。修養の進んだ人は、他人の罵詈雑言を以て、自己の修養とするのである。老子の「善人は不善人の師なり。不善人は善人の資なり」と云ふのも、此の宗教的の考を加味して一層深い味があるのである。

▲蓮師の訓誡

蓮如上人の御一代聞書の中に

前々住上人仰せられ候。信決定の人をみて、あのごとくならて



はと思へばなるぞと、仰せられ候。あのごとくになりてこそと、思ひすつること、淺間しき事なり。佛法には、身をすてゝのぞみ求むる心より、信をば得るとなりと云々

と、之は丁度老子の善人は不善人の師なりといふのに當つて居る。同じく御一代聞書に

佛法者の、少のちがひを見ては、あのうへさへかやうに候と思ひ、我身をふかく嗜むべきことなり、然るを、あのうへさへ御ちがひ候。川まして我等は違ひ候はてはと思ふ心、大きなあさましきことなり云々

之が丁度、老子の不善人は善人の資なりといふに當つて居るのである。反省が即ち修養となり、逆縁が却て法悦の資料となるこ

とは、世に決して少くないのである。

### 舜を學ぶの徒

#### ▲慚愧の伴はぬ告白

近頃赤裸々と云ふことが流行して、或は自分の有りの儘を告白するのが、一種の流行になつて居る。随分無遠慮に有りの儘を告白するものがある。成程一方から云へば自分をつくり飾ることなく、有りの儘を現はすのは一應取るべき點もあるが、併し赤裸々、又は告白と云うても、之に慚愧又は懺悔が伴ふのでなければ眞の赤裸々、又は眞の告白といふ價値は無いのである。然らずして所謂赤裸々や、告白を得意がつて居るに至ては人を誤ること、思ふ。



昨年しんねんの春はるある眞面目まじめなる席まじ上で種々しんしんな告白こくはくがあつた。その時とき學まな生せいの中には無遠慮むえんりょに無信仰むしんかう無宗教むしんけう無道德むだうとくの態度たいどを暴露ばうろくして以て得意然ていいうぜんたる様子ようすのものがあつた。如何いかんにも面白くない現象げんしやうであると思おもうた。

斯かういふ現象げんしやうは、偽いつはりらない生活せいかつとか、偽善いつはりぜんを避さけるといふことが勢力せいりきを得た結果けつこ、有ありのまゝの告白こくはくが喜よろこばれるやうになつたのであらうが、單ただなる無遠慮むえんりょの暴露ばうろくや、懺悔ざんげの伴ともはない告白こくはくは本人ほんにんに取とつても、亦また社會しゃかいの爲ためにも、決きして有力うりよくなる效果けうこを擧あげることとは不ふ可能かのうであると思おもふ。

▲徒然草の教訓

之これに就つて自分じぶんは徒然草つれづれぐさの一節いちせつを思おもひ出したことである。徒然つれづれ

草ぐさの第八十五章はちじゅうごしょうに、

人の心こころすなほならねば、偽いつはりなきにしもあらず。されどもおのづから正直しやうじきの人ひとなどかなからむ。おのれすなほならねど、人の賢けんを見て善ぜんとなすは世よの常じょうなり。至いたて愚ぐなる人はまた、賢けんなる人ひとを見て之これを憎にくむ。大きな利えきを得えんが爲ために少しき利えきを受うけず、偽いつはりりかざり名なを立てんとすとあざける。己おのが心こころに従したがへるによりて此こゝの嘲あざわらをなすにて知りぬ。この人ひとは下愚かぐの性せいうつすべからず、偽いつはりりて小利せうりをも辭かたすべからず。かりにも愚ぐを學まなぶべからず。狂人きやうにんのまねとて大路おほぢを走はらば即すなはち狂人きやうにんなり。惡人あくにんのまねとて人ひとを殺ころさば惡人あくにんなり、驥きを學まなぶは驥きのたぐひ、舜しゆんを學まなぶは舜しゆんの徒たなり。偽いつはりりても賢けんを學まなばんを賢けんと云いふべし。



と云ふ言葉がある。世に眞に道を求め、法を得んとする人は斯ういふ態度でありたい。

兼好法師は人間の等級を三段に分けて觀察してゐる。第一は心のすなほな、少しも偽りのない立派な人物でこれは上等の部に屬する。第二は自分は左程正直と云ふ程でなく、すなほでない處があつても、正直な人や、すなほな人を見ると、あの人の様になりたゐものだ、あの人は感心な人だと、賢者を見て褒むる心が起る人、これは中等の部に屬する。第三は自分が不正直で、すなほでないばかりか、他人の正直な行や立派な行を見ても、少しも之をまねようとしないうて、いろ／＼と難癖をつけて之を傷付けようとする愚人、之れは下等の部に屬する。一例を挙げると、こゝに自分の利

害を省みず、公共の爲め献身的に働く感心な人があるとする。下等の輩は之を見て、なにあの人は實は大なる利益名譽を得んが爲めに小利小名を貪らないので、つまり大なる慾からやるので、決して感心するに足らないのだと。彼等は自分の心を以て人を付度するので、かういふ人間は所謂移すべからざる愚人で、濟度の六ヶ敷い輩である。斯な人間は眞似でも小利を思はないと云ふことは出来ない類である。

是に於て兼好は第二類の人を揚てゐる。たとひ眞似でも善事は勵まねばならぬ、同時に愚悪は決して學んではならぬ。なぜなれば狂人の眞似だと云うて大道を走れば、人は之を狂人と呼ぶにしまつてゐる。悪人の眞似だと云うて人を殺せば、その人は直に



悪人となる。之に反して駿馬の真似をして、一日千里を走る馬があれば、それはやかで駿馬である。此道理よりおしたなら、盗姦を學ぶ人は即ち盗姦であり、舜を學ぶ人は舜の徒である。されば偽りても賢を學ばんものは即ち賢者である。——賢善の道に進み、愚悪より遠ざかるの方法は餘蘊なく説破せられて居る。

▲舜を學ぶは舜の徒

今の多くの人は他の人の殊勝な様子を見て、自分が其域に至らんと希望せずして、彼は偽善だとか、彼は囚へられてるとか、彼は異安心だとか——悉く批難し去つて自分が努めて、さうならうとはしない。之は今日修養上移す可らざる下愚の人ではあるまいか。私は寧ろ自分の信仰は未だ至らなくても、又疑が晴れなくても、努

めて信仰の行狀を見慣ひ、或は念佛三昧に入つて修養を怠らないやうにして行く——それがやがて信仰に入る道程ではなからうかと思ふ。所謂驢を學ぶは驢のたぐひ、舜を學ぶは舜のたぐひと云ふは之であると思ふ。

▲備前の孝子

昔備前岡山の池田光政公の領内に、甚助といふ孝子があつた。家貧であるが孝養怠りないので、いつしか此事が光政公の御耳に入り、殊の外御賞めに預り租税なども免除せられた。然るに同じ所に住む者で、甚助の真似をする人があつた。之も頓て光政公の御耳に達したので、甚助同様の賞與を下されようとした。すると家來が申上げるのには



「この度の男は只甚助の眞似をしたに過ぎませぬ。斯る者には御褒美下さることは無用に存じます」

すると光政公は

「孝行の眞似ならいくらしてもよい、甚助同様に褒めて遣はすが

よいぞ」

と仰せられたと云ふことである。盗妬の眞似をするものは盗妬であるなら舜の眞似をするものは舜であらねばならぬ、お互に修養上に於ても確かに味ふべき點であると思ふ。

蓮如上人の御三代聞書には

信決定の人をみて、あのごとくならてはと思へば、なるぞと仰せられ候

とある。信仰のある人を見て其人のやうになりたいと心掛けて、眞似をして住く中には、終に信仰の門に入ることが出来るやうになるのである。

▲殊勝なる尼僧の身の上

昨年九月小田原に赴いたとき、酒匂の藤井瑞枝女史の宅で、一人の浄土宗の尼僧に遇つた。此人は酒匂の在鴨宮の光照寺の住職で、今泉妙運尼と云ひ當年六十二歳であるが、道德堅固に念佛三昧の日暮らしをしてゐる。此人の一生は實に波瀾曲折、男子でも容易に堪ふることの出来ない幾多の艱難と闘つた人で、誠に立志傳中の人である。此人は本名は歌子と云つて、日本橋横山町の金物問屋坂庄兵衛の三女である。此金物問屋は三代も續いた老舗で、



一時相應に繁昌した店であるが、歌子が五歳の時、母のお孝が病死して以來、家勢は急に衰頽に赴いて、歌子の將來は不安なる雲に閉さるゝに至つた。

爾來、歌子は十二三歳頃までに六人の繼母に仕へた、丁度七人目の繼母を迎へたとき、父の庄兵衛は倒れかゝる家運や、愛兒の身の上などを心配しつゝ、遂に墓場の露と消えた。時に歌子十四歳。

杖とも柱とも頼む父親に別れた歌子は、繼母お蝶と兄喜太郎とを助けて、家運の挽回につとめたが、なか／＼はか／＼しくない、彼女が十七歳の時、常陸の人今泉惣兵衛と云ふ實着な若者が、共嫁ぎの世話女房を探してゐたので、歌子は之に嫁して、夫婦共稼して傍ら兄を助けようとした、此時惣兵衛は僅かに廿六兩の蓄財しか持

たなかつた。

新夫婦は大に奮闘努力の結果、十年間に約一萬圓の資産を作つて、靈岸島に立派な船造具の店を出した。處がある冬の寒い眞夜中に日本橋箔屋町から火事が起つて、十年苦心の結果になつた歌子夫婦の家財道具は、一夕にして灰燼に歸してしまつた。次來失望と落膽の爲めに惣兵衛は心身疲勞して、遂に翌年の秋恐るべき肺病にかゝつて不歸の客となつた。

#### ▲か弱き女の奮闘

十年の苦心悉く水泡に歸した歌子は、更に良人惣兵衛に別れて悲歎にくるゝ間もあらばこそ、か弱き女の腕一つで四千餘圓の良人の借財を脊負つて立たねばならぬ悲境に陥つた親類も債權



者も破産處分を彼女に迫たが、歌子は心に決する處あつて、債權者に嘆願して向ふ十年間借金支拂の延期を乞うた。鐵の如き冷い心をもてる債權者は容易に承知しなかつたが、歌子の熱心は遂に彼等をも承諾せしむることとなつた。時に歌子は廿七歳であつた。爾來歌子は十數年間奮闘して家業を續け、あらゆる辛酸を嘗た結果遂に先夫の十三回忌迄に美事借財を返済し終つて剩へ千餘圓の蓄財も残した。是に於て彼女は篤く先夫の佛事を營み、之を限りに家をたゞみ、緑の髪も切り落して、妙運尼と云ふ法名を貰つて尼僧の生活に入つて、良人の菩提を弔ふことゝなつた。乃ち彼女は四十歳の晩年を以て淨土宗の尼僧學校に入り、年若き尼さん達と机を並べて勉強した。此間の苦心も一と通りてはなかつた。

首尾よく卒業の後、同じ運命の下にある妹弟子の知運尼と共に全國を行脚すること前後五ヶ年、遂に青山善光寺内の廣閑院に入つて餘生を樂むことゝなつた。然るに其道徳の堅固、信念の麗はしいことが、多くの人の知るところとなつて、妙運尼の道譽は日にまし盛になつた、其後神奈川縣下酒匂在鴨宮光照寺から特に屈請されたので廣閑院は知運尼に譲つて自ら光照寺に赴いたのである。爾來六七年の星霜を経て今日に及んだが、段々と檀徒の歸するものも増えて、荒れはてた寺が見ちがへるばかり立派になつた。尼は毎朝三時頃から起きて念佛勤行をはげみ、少しも怠る所がない。常に近隣の者を憐み慰め、頼りなき者を助くるなど、まことに奇特の行に富んでゐる、附近の人々が活始來の如くに尊敬してゐ



るのと誠に故あるかなである。

▲懺悔と感謝の生活

私は今泉師の經歷を聴き、其奥床しき風貌に接した時、一種畏敬の念が生じたのである。我真宗の立場から云へば自力修行では、佛になることは出来ないのて氣の毒な感じもあるが、併し師の道徳堅固な様を見ると、自分の懈怠、放逸の生活が思はれて慚愧に堪へない感がある。此の話は前の話と直接の關係は無いが、之を修養上の手本として注意を拂ふのは、決して無用の事ではないのである。無慚無愧、放逸なる暴露——告白を得意とする現代に於て、斯ういふ清新な信仰生活をなす人のあるのを見て、大に力強く感ずると同時に、自己の上に反省して、修養上警策し、努力し、以て懺悔

と感謝とに、充ちたる生活に入ねばならぬと思ふのである。

迷信とは何ぞや

▲迷信と學問

迷信とは何か、迷信とは信ずるだけの價値の無いものに、打込んで信ずるを云ふのである。併しながら迷信と云うても、信ずる本人は迷信と云うては居らない他人は何う批評しやうとも、自分では之を信じ、之に道理があると思つて居るのである。それでは議論は全く無いことになるが、今日は學問も開け、人智も進んで居る世の中であるから、宗教上に於ても迷信を決めて置くのも必要と思ふ。



現代世間の人が重きを置くのは科學である。此の科學の立場から觀察し、學問の道理に合はぬものを迷信と稱して居る。之は一應尤もであるが、普通の學者が學問以外は皆迷信なりと斷ずるのは少し早計である。成程學問には權威がある。學問で解決できぬものは迷信であるとも云へる。彼の稻荷を祭り、御水を服し、御圖を引く——之迷信である。更に進んで學問で分らぬ佛様を信ずるのも迷信であると併し速斷するに至つては容易に首肯することは出来ない。

## ▲學理の變遷

彼の稻荷や御水や、御圖を信ずる下等の宗教と佛といふ高等の宗教とを一所に混じ去つて、迷信と斷ずるは、玉石混淆以上の謬論

である。是に於て學問の權威、道理の價值を詮索するの必要がある。元來學問は時代を経るに従て漸々進歩發達して往くものである。而も學問で人事界一切の事柄が分かるかと云ふに、決してさうでない。分らぬ問題が頗る多い。將來益々學問が進みて行くべきも、分らぬ問題は無限に存在して居るのである。従つて學問の進歩は、前の學問が役立つたことを證明し、又今の學問も將來永遠に確實なるものではないことを證據立てゝゐる。寧ろ將來には缺點を見出され破壊される可き性質のものであれば、こんなものを信ずるのは、之亦前の筆鋒で迷信と云ふ事が出来るのである。

例へば物理學上の引力説——之は誰も知る如くニウトンの發



見である。之も一種の假定説である。科學上の問題は其の根柢に假定がある。假定の上に成立したものに過ぎないのである。故に何百年かの後には引力説は破れるかも知れない。又ガリレオは地動説を唱へ出した人である。ガリレオ以前は天動説で在つたので、彼は奇怪な説を以て人を惑はすと云ふので、嚴罰を受けたが、今日お互は地動説を信じて居る。之は地球——天體を説明するのに都合がよいからである。太陽から地球に光と熱とが傳はる。之はエーテルに依て傳達せられると云ふ。エーテルは何かと云へば假定説である。近來はエーテルでは工合が悪いので、電子と云ふ新説が出たが之も假定説である。即ち學問界科學上には萬古不易の定説は立ち得ぬので、時代と共に變遷を免れぬもの

のである。以て學問の權威が絶對でないことが分る。

夫れ故學問上で、有るか無いか分らぬものを信ずるのを迷信と云ふならば、さういふ學者自身も假定説を信ずる迷信に陥つて居る譯である。吾々が阿彌陀佛を信ずるのを迷信と云ふなら、科學者自身も同じ程度の迷信に陥つてゐることを認めねばならぬ。

#### ▲迷信の種類

然らば今日一般宗教の信仰は皆健全であるかと云ふにさうてはない。其等信仰を調べて見ると所謂迷信が多い。是に於て何者が果して正信であるか——を明かす必要がある。之は頗る難しい問題であるが、先づ次の三點を以て正信迷信の區別を述べたいと思ふ。



一、自己の信する對象が、信ずる丈の價値の無きものを信ずるもの。  
 二、其對象が信ずる價値ありとするも、現世利益の念を以て信ずるもの。

三、信ずるに足る根據なきものを信ずるもの。

▲信ずる價値なきもの

第一、信ずる對象が信仰の價値なきものとは狐や猫や牛の如き動物、大木とか其他の植物、又は山川等を信ずるなどの類である。早い例は稻荷を信ずるなどで、こんなものは常識でも、價値のないことが分る。價値がありさうで間違ふのは木佛畫像の信仰である。此の木佛畫像が吾を救ふというて信ずるのが迷信である。

木佛そのものは木、畫像其ものは布や紙である。木や布紙が人間を救ひはしない。吾々は其木佛畫像を通じて、神佛を拜し、其神佛を信仰するのである。木や紙に囚へられてはならぬ。之を蓮如上人は

木像より畫像、畫像より名號

と仰せられた。之は木像よりは畫像が弊害が少なく、畫像より名號の方が弊害が無いからである。多くの人は木佛畫像の木と紙とを信ずるのではあるまいか。之即迷信である——吾々は其の木佛畫像を通じて眞佛本體を信仰するのてなければならぬ。

▲現世利益——祈禱

第二は信ずる對象は、立派な觀音や薬師でも、現世利益の爲に信



仰するなら之亦迷信である、

心だに誠の道にかなひなば

祈らずとも神や守らん

吾々が神佛を拜禮尊崇するに、自己の利益、自己の繁榮の爲に利用すると云ふは、いかにも謂れないことである。世俗、一般の信仰は恐らく皆此類を出でない。畏多い話であるが、先帝の御病氣に際し、全國の人は神佛に祈願したのである。小學校の教科書に祈禱は迷信だと書いてあるに拘らず、縣廳や郡役所からの達示で鎮守様への御百度参りをやる。而して明けても暮れても祈禱祈願をするが、それをせぬと不忠者。忠君愛國者でない、亂臣賊子だと罵つたものである。神道は勿論のこと各宗何れも祈禱を行つた。

祈願せぬのは眞宗のみであつた。全國の人々が厚き祈願をかけたにも拘らず、陛下は終に崩御遊された、御利益は無かつた。眞宗の信者とても、陛下の千代かけての御在世を願はぬものは一人もない。併ながら、人間にまします以上は、祈禱で壽命がのほせるものでない。此道理が分つて居るから敢て現在利益の祈願をしなかつたのである。斯ういふ事は平生精神の靜かに、確りした時に決めて置かぬといけない。事の起つた時に云へば感情を害して面白くないことになるから餘程注意すべき事である。

▲天海僧正と火の柱

徳川三代將軍家光の時、江戸城の北に當て毎夜火の柱が立つ、之は御殿に火事のある前兆であると云ふ評判が高まつた。奥向の



女中を初め、役人達も大心配で、兼て事ある時は天海僧正に相談せよとの東照公の御遺言であるので、使者を以て事の由を告げ、城中に於て火除けの祈禱を願ひたいと申入れた。普通の僧侶ならば此時こそと駈せ參じて祈禱をするであらうが、流石は天海、泰然として之を斷つた。使者は何ういふ譯であるかと尋ねた處が、今は忙しいと答へた。いくら忙しくても將軍家の御用、之を疎外しては相濟むまいと云ふと、天海は

「自分は旦暮天下國家の安寧を祈らぬ日はない。徳川家の御殿が焼けるなど、そんな小さな事に關つて居られぬ。焼けたら又お建てなさい。それが建たぬ位なら徳川家も見込みがないと申上げたがよい」

と云はれた。役人は驚き歸つて此事を申上ると、家光はよし／＼と仰せられて、祈禱は沙汰止みになり火の柱の噂も間もなく消えて仕舞ふたといふ事である。

元來佛教で祈禱するのは、本義ではない。之は支那の陰陽道が交つて來たのである。東京近くでは成田の不動が最も現世利益の御祈禱で繁昌して居る。かういふことは住職の本意でなくとも、向ふてさう頼んで來るので、舊慣に従てやらねばならぬ、と云ふ様なことが往々あるものである。成田に公共、感化、救濟事業の盛んなのは此住職の善き計らひであると思ふ。又上州太田の香龍さんは安産の御符を出す。之は淨土宗の寺であるが、淨土宗の精神には確に違反してゐるものと思ふ。これも舊慣によつてや



つてゐることであらうが。何れにしても明かに迷信と云ふべきである。

▲根據なきもの——日の吉凶

第三、信ずるに足る根據なきものとは、日柄、方角等の吉凶を選ぶこととて、之も常識で判断が出来る、新聞に九星が載せてある所を見れば、日柄の吉凶に屈托する人が多いことと思はれる。妙なもので日の吉凶を心配してばかり居ると、それがどうも事實らしくなつて来る。迷ひ出すと際限の無いものである。若し吉日凶日が眞理であるとすれば、北極地方の如き一年の半年が晝て、半年が夜といふ一年即一日の土地で有つたら、吉日も凶日も無いことになる。實に愚の至りと云ふ可である。近江國の或る高僧が。春

の好天氣に、小僧を呼んで、灸をすゑて居つた。所が平生出入の骨董屋が来て、和尚さん今日は不吉の日であるから、灸はいけませんというた。和尚はさうかと云うて之をやめたが、一時間ばかりして骨董屋が歸るとすぐ小僧を呼んで、お灸をすゑてくれと云ふ。小僧が今日は不吉だというてお止めなされたてはありませぬかといふと、いや不吉はもう歸つたと答へて平氣でお灸をすゑた。日の吉凶に頓着しない所が面白いではないか。

▲方角の迷信

次ぎは方角——之も随分世間の人を悩まして居る。關が原の大戦に徳川家康は關東勢を率ゐて東から西へ向つて進軍する。家來の者が今日は日が悪い、そして西が塞がつて居るから、今日は



御見合せがよろしいと意見したら、家康頑として聞かない。「西が塞がつたら開いてやると云うて、軍を進め、大勝利を得たのである。之が反對に敗軍でもしようものなら、ソレ見たことか之だから日の吉凶は大切だなど理窟をつけたに相違ない。勝たから何の文句も無かつたのである。私は横濱で真宗の同行から實話を聞いた。其人は轉宅しようと思つて、移轉先の家も決め、愈々今日は家移りするとなつて、其人は占師に見て貰うた處、方角が悪いからいけないと云はれた。何だか氣になつて致方がないから、移轉は見合せようと云ふ、家内はもう支度にかゝつて是非今日移らねばいけないと云ふ。そこで夫婦の喧嘩となつた。良人が實に今度の家の方角を見て貰うたら、悪いと云うたから止めようと云うた

のであるといふ。家内は、私も内々て見て貰うた處、方角が大へん吉と出たので是非移りたいと云ふのであつた。そこで二人は腹をかゝえて大笑ひしたと云ふことであつた。方角に迷うた結末は大抵こんな事がおちてある。

## ▲符札の迷信

次に符札や、マジナイ、之も根據が薄弱である。播州に人丸神社といふのがある。之は歌聖柿本人丸を祭つたのである。此神社で安産と火除けの符札を出す。何んな理由かと尋ねて見ると、人丸の音はヒトマル——人生るに近いから、安産の御利益があると云ふ。今一つはヒトマル——火止ると同じ故、火除けの符札が出ると云ふ。こんな事を歡んで居る人々のおめでたさ加減が分ら



ない。

マジナイも所により盛んである。小供が蟲齒で泣いて居る、お母さんが之をつれて、齒醫者へは行かずに、眞言宗の寺へ行き、坊さんに蟲封じのマジナイをたのむ。坊さんは「アヒラ、ウンケン、ソワカ」を繰りかへす。妙に痛みが去つた。其の次母親が蟲齒の痛い時に又お寺へ出かけようとしたら、前の小供が私がマジナイしてやる。何をするかと思ふとアブラカス、ソバカス、を何邊も唱へて居る。すると母の齒痛が癒つた。之は癒ると信じて居るから、なほるので、一種の精神作用であるが。之は全くの療治でもなければ、實際常に役に立つものではない。多くの人がこんな迷信に入つて身を害ひ、身代を失ふものさへある。

要するに此等は學問の上からも、常識の上からも認めて迷信といふべく、之に陥て居るのは明かに間違ひである。

#### ▲知ると信ずると

然らば正信とは何か——吾々の智識思考を離れた範圍で宇宙の神佛を信ずる——これ眞正の信仰である。今日の學問、科學や哲學を以て見ても、知り盡すことの出来ぬのが頗る多い。而して大問題は「未來の問題」である。「靈魂の歸着點」である。之は數千年の昔から解決し切れず、又今後も永遠に淺薄な人智を以て解決し能はざる問題である。換言すれば「未來問題、靈魂問題は人間の智識を超越したものである。吾々は是に於て知識と信仰との問題に到達した、知識は目前に證據を出して理解させる。信仰は目前



に出さなくも、吾々が信ずるのである。知ると信ずるとの區別はそこにある。所で未來問題、神佛の問題は一々手から手に渡して、實驗すべきものでない。知識の對象とするとは出来ない。が併し吾々は之を信ずることが出来るのである。例へば演壇上に一個の水差かあるとする。中に酒があるか、酢があるか。醬油があるか、水があるか、或は全くの空虚であるか。實際手に取て見るのでなければ、中の物は何であるか、知ることが出来ない。併しながら、演壇の上に、コップと水こぼしと並んだ時には、此の水差しの中には當然、講師が飲むべき水が入つて居ると信ずることが出来るのである。

## ▲正信に安住せよ

未來問題に就ては何人も知り盡すことが出来ない。併しながら昔からの高僧碩徳が、身命を擲て此の未來問題に苦心なされ、それ／＼法を立てられたのであるから、吾々は先覺の教を信ずればよいのである。此以外に手の出しやうが無いのである。親鸞聖人は御師匠法然上人に歸依すること堅く、歡異鈔にはたとへ法然上人にすかさね參らせて、念佛して地獄へ落ちたりとも更に後悔すべからず候と仰せられた。念佛の外、助かるべき道はない、念佛が絶對の信仰であるのである。今吾々が一知半解の知識を以て、大なる未來問題に向ふは、誹呼の沙汰である。須らく先聖の教に信順して安心立命すべきである。之れ即ち正信である。迷信を排したる吾々



には信仰なしにうろついて居ることはできぬ。正信を求めて法味愛樂の樂地に入り、以て人生社會に活動せなければらぬと思ふのである。

### 先帝の御聖徳

#### ▲老子の三寶

先帝陛下の御聖徳は、到底私共の拙き筆や口に述べ盡すことは出来ません。私はせめて御聖徳の一端を御紹介申して、皆様と共に陛下をお悼み奉る微意に代へたいと思ふ。老子の中に三寶の説があります、假に其説を借り來つて御聖徳を窺ふよすがとします。老子に

我有三寶。持而保之。一曰慈。一曰儉。三曰不敢爲天下先。

と申す語があります。慈は慈悲とか慈愛とか申す慈で、いつくしみ愛する意である。儉は勤儉とか節儉とか申す儉で、おごらざること、つゝまやかなる意である。事を省き、用を節する意もある。最後の「敢て天下の先をなさず」とは、卑下謙讓の意である。物事下た手に出ることである。老子は更に之を解釋して、

慈故能勇。儉故能廣。不敢爲天下先故成器長。

と云つてゐる。先づ第一の「慈なるが故に能く勇なり」とは心に慈愛が満ち／＼てゐればこそ眞正の勇氣も湧いて來る。慈愛の精神を缺いた勇氣は匹夫の勇である。眞正の勇とは云へない。ピクトル、ユーゴーが「女は弱い併し母は強し」と云へるも此の意味で



ある。些細なる事柄にすら恐怖する女でも、我子の危難に遭遇してゐるのを見ては、シツトしてゐることは出来ない。直ちに危嶮を冒して子供を救ふに相違ない。かゝる大勇猛心は何處から出るかと云へば、我子の可愛いと言ふ慈愛の精神からである。大無量壽經中の法藏菩薩の誓願を讀んだものは、一層此處の意味を了解することが出来るであらう。次に儉なるが故によく廣しとは、儉約であり、つゝまやかであるから、自然に餘裕が出来る。餘裕が出来から廣く福を分つことが出来る。奢侈贅澤三昧でゐて、廣く他を恵むと云ふ様な行は出来るものでない。最後の敢て天下の先きをなさず、故に成器の長たりとは、凡て物事下手に出て卑下謙讓すれば、萬民の長たる事が出来る。例へば一軒の内でも、主人

になるものが謙讓の徳を以て下に臨めば、下々の者も主人を徳として仰ぐに至る。之に反して主人が己れは偉らい、貴様達は無能で駄目ぢやと云つて、效を自分一人に歸してしまふと、召使の者共は、却て主人の驕慢をおこつて心服しないようになる。こゝの吸呼は人に長たるものゝ心得ておかねばならぬ點である。

▲慈悲ある勇氣

以上は老子の三寶の説を概略述べたのであるが、今先帝陛下の御聖徳を此説より味はさせて戴きたいと思ふ。

先づ先帝陛下は御勇武絶倫にましました御方である。嘗て日清日露の戦役に於て、我國が未曾有の大捷を克ち得たのも、偏に陛下の御勇武なる御資性の賜であると感謝せざるを得ない。併し



其御勇武は、決して小闘を好ませらるゝ匹夫の勇でない。陛下の仁慈なる大御心より發した勇氣である。

國のためあだなす仇をくたくとも

いつくしむべきことな忘れそ

かつて戦争の始めに

四方の海皆はらからと思ふ世に

なぞ波風の立ちさわぐらん

との玉ひし大御心と對照して考へたなら、陛下が如何に御仁徳の心に富ませられたかと云ふことを伺ふことが出来る。果せる哉、かの旅順總攻撃の際に於て、陛下は特に乃木大將に命じて、敵の非戦闘員である婦人や小供を特に危険界の外に避難せしむる様に

取計へとの有難い御命令があつたと承つてゐる。又旅順陥落に際して敵の敗將ステツセルは天晴の大將であるから、帶劔の儘敬意を以て之を遇せよとの恩命さへ下つた。流石のステツセルも此天恩の優握なるを感泣したと云ふことである。

由來西洋諸國は基督教國民を以て、人道を解し、平和を好愛するものとし、異教徒を以て人道に反し、平和を破壊するものであるかの様に誤解してゐた。始めて我國の赤十字社に加名を申込んだ際の如き、非基督教國の日本が、か様な世界的事業に加參する資格がないと斷つた位であつた。やつこのこととて我國の歴史を引き出して、我國には古から戦争にも敵をいたはつた例があると、小楠公の古例などを引き出して、加名を許可せらるゝ様になつたとの



ことである。此の如く輕侮の念を以て迎へられた我赤十字社が、嚮の二大戦役に於て遺憾なく好成绩を表はし、却つて人道の本家本元を以て自任せる彼等基督教徒に於て、人道に反する行爲の多かつたのは等しく世界の耳目を驚かした所である。

東にま廣き人の道あるも

此大君の御世に始まる

とさる女詩人が詠まれたのは實に至言である、老子の所謂慈なるが故によく勇なりの意味も陛下に於て始めて之を見るのである。

▲恐れ多き御儉徳

次に陛下は非常に御儉約の御方であつた。日常御生活の質素にましましたことは實に意想外であります。一度宮城内を拜觀

した外人は、異口同音に陛下の御儉徳を傳へないものはない。

陛下は夏の熱き日も、冬の寒き日も、未だ避寒避暑の爲に離宮に御出まし遊ばしたことがない。却つて下々の吾々は熱さ寒さに土地を換へて遊惰に耽つてゐる。誠に陛下の御勤勉御儉素に對して恐縮の至りである。

あつしとも云はれざりけり煮えかへる

水田に立てる賤を思へば

賤が住むわら屋の様を見てぞ思ふ

雨風あらしき時はいかにと

昔は深夜に御衣を脱し、民の寒苦を察し給ひし主上があつたが、陛下の下民を思ほしめさらるゝこと又之れに譲らないのである。



又蝸牛の御歌に

さゝやかに見ゆる家居もかたつむり

獨り住むにはことたりぬべし

と申すのがある。嘗て離宮の増設を願出たとき、内親王や皇孫の爲ならともかくだが、朕の爲なら不用であるとして、容易に御採用遊ばさなかつたと申すことであるが、此御歌を思ひ合はされて大御心の程を拜察することが出来る。知足安分は釋尊最後の教誨であるが、陛下の御歌と共に永く感銘すべきである。此の如く御儉素にましましたにかゝはらず、下人民の爲には惜しげもなく内帑の金を發して救助慰籍の道を盡され給うた。大風雨とか洪水とか地震とか火災とか凡そ人民の難儀の起つた場合には、常例の如

く御慰藉の金を賜はられた。特に先年は百五十萬圓と云ふ大金を御下賜遊ばして下民救済の資に當てさせ給うた。此の如く恩澤が遍く下人民に及ぶのは、所謂儉なるが故に能く廣しの意で陛下御儉徳の然らしむるのである。陛下は戊申詔書に「勤儉産を治めよ」と仰せられてゐるが、陛下は御自身に範を御示し下されてゐる。我々人民たるもの、どうしてか御聖旨を服膺せず居られましよう。

▲偉大なる謙徳

最後に「敢て天下の先きをなさず、故に成器の長たり」と云ふ意は、人君たるもの最も大切なる徳の一である。陛下は人を見るの明に於て優れさせ給ふ所があつた所謂適才を適所に措かれた。而



して一度御任命になればよく之を御信任遊ばして、臣下をして充分其能力を盡さしめ給うた。所謂野に遺賢なしとは明治昭代を讚する適切の言であらう。而して陛下は凡ての功を御一身にをさめないて、臣下に歸しておしまひなされた。汝等の功によつてかくの如くなつたと、常に卑下遊ばした。試に思へ！日露の戦役と云へば、陸軍では乃木大將、海軍では東郷大將に先づ指を屈する。御維新の改革と云へば、西郷南洲や大久保、木戸公等に指を屈する。そして世人動もすれば此等の人々によりて大事が出来た様に云つてゐる。如何にも此等の人は偉いには相違ないが、此等の人の上に主上陛下がましましたことを氣付かなかつた人さへある。陛下が御崩御遊ばして、今更の様に陛下の御偉大にましましたこ

とを驚嘆するので、御在世中には却つて御偉大なことに氣付かなかつたのである。之れが即ち陛下が人君たるべき偉大の器量を御備へ遊ばした點である。

空蟬の世はやすらかにをさまりぬ

我を助くる臣の方に

と申すのがありますが、如何にも陛下御謙讓の徳が現はれてゐるのであります。

此の如く陛下は老子の所謂三寶を兼ね備へ給ふ御方であつて老子を地下に呼び起したなら、我理想の人を得たと喜ぶであらう。明治四十五年の歴史は、實に陛下の御聖徳を證するもので、此昭代



に遭遇したる吾々は、實に一身の光榮とすべきである。吾々は先帝陛下に蒙りし重恩を以て、今上陛下に酬ひ奉らねばならぬ。先帝陛下の大御心を服膺するは、やがて今上陛下に盡し奉る所以の道である。大正の國民たるもの一層の奮勵を要するのである。

### 宗教に入るの門

#### ▲各異れる求道者の動機

近來、青年と云はず老年と云はず、あらゆる人から道が求めたい信仰が得たいと云ふ呼び聲が起つて來た。これは獨り宗教界の上のみならず、社會國家の上から云つても誠に喜ばしい現象と云はねばならぬ。而して今これ等の人がかく宗教を要求するに至つ

た動機を調べて見るに、或は品性を陶冶し、人格を造るには宗教の門に入るがよいとて宗教に入つたものもあらう。或は複雑なる人性に處して、種々様々なる煩悶苦惱が胸中に湧き、これを慰藉せんがために宗教に入つたものもあらう。或は家庭がうまく治らぬ所から、宗教に依つて圓滿なる家庭を造らんと欲し、扱ては信仰を求めやうとするに至つたものもあらう。或は法律や政治ばかりでは社會國家の經營がむづかしい、これには宗教を利用するが便利であらうと云つて、こゝに宗教の門戸を叩くに至つた人もあらう。

#### ▲宗教の眞面目は他にあり

余はこれ等の人に向つて、それを否難するものではない。佛教の



經典を見ると、宗教の門が色々の方面に開かれて居て、色々の方面から這入つて來るものが、各其れ相應な法益を蒙むつて居る事蹟が澤山ある。けれども宗教の所謂堂奥に入つてその眞味を味はふとするには、これ等の動機から這入つた人には、容易なことで味はゝれはすまいと思ふ。余が思ふには、品性を陶冶し人格を造らんがために宗教を求むるものは、これ宗教を以つて一種の砥石となすものである。また、煩悶苦惱を慰藉せんがために宗教を求むるものは、これ宗教を以つて一種の清涼劑とするものである。次にまた、家庭の圓滿や國家の經營のために宗教を求むるものは、これ宗教を以つて一種の道具に使ふものである。これ等は總べて宗教を宗教として扱はないて、宗教を一時便宜のため方便のため

に使ふものである。一體宗教中でも佛教は、教が多方面に亘つて居るので、砥石や薬や、或は道具に使用しても相應な利益があるに違ひはないが、本來の面目はそれ等てなくて他にゐるのである。

#### ▲靈の救済と絶待的價値

然らばその面目は何か、曰く靈の救済である。吾人の心靈を迷界より悟界に轉ぜしめて、永遠の救済を遂げしめるにあるのである。故に宗教は絶待性のものである、決して他の方便などに使ふべきものではない。忠孝は我道德の根柢であるが、その忠孝は絶待性のものである。國を治めるために必要だから、忠義は盡さねばならぬとか、家を護るために入用だから、孝行は勵まねばならぬとか云ふ様なものではない。況んや世から尊ばれるから盡すと



か、人から譽られるから勵むとかと云ふのでないとは勿論である。眞實の忠臣孝子は、人が褒めやうが、貶さうが、せずには居れない。忠や孝をするのである。それと同じく宗教の信仰も、方便や利用のために信ずるのではなうて、我はこれに依らねば安んぜられないからこれに依り、我はこれを信じまいとするも、信ぜざるを得ないからこれを信ずるのである。宗教の眞價はそこにある。楠公は、後世神に祠られると豫想して、南朝に忠勤を抽んでたのではない。赤穂の四十七士も、後世芝居に演ぜられて名譽を博せんがために復讐をしたのではない。實に忠勤を抽んでざるを得ず、復讐をせざるを得なくてかくは實行したのである。そこで忠節の價値が無限になる。今宗教の信仰もその如くて、これを絶待性のもの

のとしないうて、或は他に利用し、或は一時方便に供せんとしたならば、宗教信仰の價値はさまで尊くもないことになる。こは余が今日宗教に對する態度である。

▲罪惡觀を通過せざるべからず

余はかく宗教の信仰を、吾人が靈を救ふ絶待性のものと認めてこれに向ふのであるが、これに向ふに付いては必ず通過せねばならない。關門があるのをまた認めて居る。その關門には、運命觀とか、生死觀とか、或は罪惡觀とかと云ふやうに澤山の種類がある。吾人はその内、何れの關門から入るもよけれども、余が今、必ずくぐらねばならない關門と痛切に感じて居るのは罪惡觀の關門である。佛教中、殊に如來他力の救済にあづからんとするには、是非と



もこの關門は一度はくゞらねばならないと思ふ。罪惡觀とは、云ふまでもなく吾人は元來罪惡のものである、現に日夜罪惡を犯しつゝあるいたづらものであると云ふ自覺を起すことである。この罪惡觀は、これを別ければ哲學的と宗教的との二つに別れる。哲學的罪惡觀と云ふのは、哲學上から論じて、吾人の心性は本來惡である、と云ふので非常にむづかしい。て儒教の方でも古來この問題は甚だやかましい。同じく孔子の教を祖述するものゝ中ても、孟子は性善を唱へ荀子は性惡を唱ふと云ふ有様。殊に佛教の中ては、信仰の立場が違ふ毎に説が區々となつて居る。即ち起信論では、吾人本來の自性は清淨無垢即ち善であつたが、無明煩惱のために蔽はれて惡となつたと云ひ、天台では吾人の心は元來善惡

共存である。而してその内で眞理に契つた心が起れば善となり、然らざれば惡となると教へて居る。また眞宗等の如き淨土門では、吾人は初めから無有出離之縁と云つて、生死を出ることの出来ない罪惡深重のいたづらものと決めてしまひ、吾人の心中には些も善はない、偶々あるが如きも、これは虚假の善である雜毒の善であると云つて居る。

#### ▲宗教的罪惡觀と標準の高低

この哲學的方面の罪惡觀は、右の如き有様で非常にむづかしいが、今一つ宗教的方面の罪惡觀は、吾人はこれを味はふに甚だ易い。とは云ふものゝ、今一般の人は、吾人は惡人である罪人であると痛切に感じて居るであらうか。中には云ふものがあらう、私は何も



人を殺したり人の物を盗んだり、または姦姪を敢へてした覺えはない。況んや國法に背いて牢獄に繋かれたことは曾てない。だから罪惡觀の起らう筈がないと。併しかう云ふ人は罪惡の標準を非常に低くして居り、且つ自己を省察することが極めて疎漫であるからである。若しもこの人等の云ふが如く、法律上で咎められたり、社會の制裁に觸れるやうなもののみを以つて罪惡としたならば、或は世上に罪人はあまり多くなき、従つて罪惡觀も痛切に起るまいが、今少し標準を高うして、口に發した毒語や胸中に浮んだ惡念迄も悉く罪惡としたならば、天下何れのところにか、我は罪人にあらず、惡人にあらずと高言し得られるものがあらうか。普通世間では標準を非常に低うし、罪惡を形而下のもののみに限つ

て居るから、人の物を手づから盗むとか、人を現在殺すとかでなく、ては罪惡と認めて居ないけれども、吾人は今眞摯に自己の心中を省みたならば、罪惡の未遂犯、或は未發犯としては、たしかに殺人もすれば強盜もし、或は姦姪もして居るのである。乍併幸に吾人は今迄それが行爲として外に現れなかつたと云ふは、元來吾人の心中が善かつたのではなうて、周圍が幸にこれを助長して呉れなかつたからである。これと同じく、己を行爲に現して法律上の罪人となつたと云ふものも、彼れが初めから他人と違つて、別して惡心が深かつたためではなうて、それが行爲とならんとする一刹那に、周圍の影響が助長して遂げ犯さしめたものに過ぎない。かく考へ來らば、法律上の犯罪者と然らざるものとは、果してどれだけの



差があるであらうか。實に間髪を容れざるの差と云はねばならぬ。

▲小川博士の懺悔談

● 先年監獄局長の法學博士小川滋次郎氏が、求道學舎で懺悔話をせられたことがある。その時余も席上に居合したので親しく聞いたのであるが、博士は云はれるに、

私は曾ては大の宗教無用論者であつたが、後職を監獄局に奉じてから監獄の囚人に僧侶の教誨が効を奏するのを見、宗教は無教育なもの、悪人罪人にはなる程無用なものでもないと感じるやうになつた。けれども教育のあるもの、善人には如何にしても必要を認むることが出来なかつた。所が近來に至り、獄窓に繋がれて

居る囚人と大道を濶歩して居る吾人と、罪惡を犯して居る點に如何程の差があらうか、彼等とても本來の罪人ではなかつたが不圖した事から思はずも、一生浮ぶ瀬のない囚人となつた氣の毒なものであるが、今學問があり、教育があるものは、それを巧に應用して法網を自由にくり、青天白日の下に濶歩して居るけれども、犯罪の點は囚人の遠く及ばざる所が澤山あるかも知れぬ。これを思ふと囚人と否らざるものとの差は殆んどないと云つてもよい。然らば獄窓の囚人に必要な宗教なれば、その他の人にも同じく必要であるべき筈であると感じるやうになつた。

▲窮極せる罪惡觀は救濟を仰がしむ

博士は更に曰く。「先日も私は、錢湯に行つて板の間に垢をすつて



居ると、後を通る人が私の背に熱湯を二三滴かけたので、私は直に「失敬なッ！」と云つて後の人を強く打つた。ところがそれは小さい子供であつた。彼は、兩手で熱湯の入つた湯桶を運ぶ際誤つて滴を落したのであつた。彼は、叔父さん御免なさい。」と云つて謝罪つて居た。私は非常にきまり悪く感じた。お湯もそこゝにして急に内に歸つた。そして靜に考へた。若しもその時それが子供でなうて大人であつたらどうだらう。彼は決して打たれて黙つてはゐまい、彼一言、我一言、必らず一の修羅場を現出したであらう。若しもさうなつたらば、それこそ忽ち新聞の三面記事を賑はすことゝなるは必定である。それを思ふと、實に我身の淺間敷さをつくゞ感ぜずにはゐられない。實に慚愧に堪へぬ次第である云々。

これ、博士が些細なことから罪惡觀を起されたものである。實に博士の言の如く、吾人は誰でも常に、いつ破裂するか知れぬ怖ろしい罪惡の爆發彈を心に抱いて火の側を彷徨して居るのである。吾人は自己の罪惡をこゝまで感じたならば、その怖ろしさに堪へないで、これが救濟を大慈悲の御方に仰ぐと云ふは當然の順序である。今宗教、殊に他力信仰の教は、この罪惡に艱める吾人に向つて唯一の救濟の使命を傳ふるものである。故に吾人が自己の罪惡を痛切に感ずる時は、これが救濟者たる宗教をば、自己にとつて何うして一時の方便や他への利用に供することが出来ようぞ。こゝに至つて始めて宗教の絶待性なる事も知れ、無限の價値の宗教に入るの門



教信仰に存することも分るのである。

▲宗教の信仰は親の大悲を仰ぐが如し

かく云は、人は或は云ふかも知れん。法律や倫理は人の罪惡を何所までも追窮して責めるが、宗教は寛容にもこれを許して少しも咎めぬと云ふならば、宗教を信ずるものは悉くよい氣になつて罪惡を犯しはしないかと。何程一應聞けばそんな風にも思はれるが、それは未だ宗教を信ぜざるもの、杞憂に過ぎぬ。昔放逸無頼の一人息子があつたが、兩親はおろか、親類縁者も殆んど持て餘した揚句、或日これ等の人が一堂に會して、斯の如きものを家に置くは、曾に親の家財を盡すのみではない、後には迷惑が親類縁者にまで及んで來るに違ひないから、今の内に勘當しよう。」と云

ふ決議をなし、互に連署して捺印した。然るに彼の兩親は、愈捺印と云ふ機に臨んだところ、恩愛の情に引かれて如何にも彼を勘當するに忍びぬ。そこで、私が是迄辛苦して蓄へた家財は、實は彼に譲らうがために蓄へたものである。だから彼を勘當して私が所有するも何にならう。今は彼からそれを消費されるのは私に於て寧ろ満足する所である。」と云つて何うしても勘當を證認しなかつた。所が今この兩親が彼に對する無限の愛情より出る語を物蔭から聞いて居た彼は、それを聞くなり父母や親戚の前へ踊り出て、從來の放逸を心中から懺悔し、遂にそれから謹嚴如法の人となつたと云ふ話がある。これ、彼が親類縁者の咎めには少しも心服しなかつたにも拘らず、父母が彼の放逸を許した上、家財迄も呉れよ



うと云つた大慈悲には感動せざるを得ないで、乃ち謹嚴な新生涯に轉ずる様になつたと同じく、宗教は吾人の罪惡を咎めず、如來は吾人に救濟を垂れたまふと云ふことが心中眞に仰がれるやうにならば、吾人は何としてか、よい氣になつて罪惡を猶ほ慕らうと云ふ氣になれやうぞ。必ずや廻心懺悔して新生涯に轉ぜずには居れなくなる。故に宗教ばかりは、他より彼れ是れと論じたのでは、その眞味が決して解るものではない。宗教の眞味は、眞摯に自己の罪惡を自覺し、如來の大悲が直接に仰がれた時てなうては決して味は、れるものではないのである。

### 懺悔の價值

(日糖事件公判終結前講話)

#### ▲卑劣なる態度

明治四十二年の春、日糖事件の爲めに、二十餘名の代議士が線纒の辱めを蒙むる様な珍事が出来致しました。此事件に付きまして私が深く感じた事は、代議士そのもの、心事があまりに陋劣である。紳士らしく男らしくないと云ふ點であります。代議士が賄賂を取つて一會社の手先きに使はるゝなど、元より大に咎むべきことでありますけれども、私は更に彼等が自分の犯したる罪を辯護して、自己の罪惡を罪惡と懺悔するの心事なきを惜むものがあります。彼等の多數の態度を見ますと、豫審で申立てた事と、公廷で申述べたこととに餘程差違がある様であります。豫審で申立てた事實をなるべく打ち消して、どうかして甘く罪を免れよ



うとした形跡があります。勿論法律上から申せば豫審で申立てた事と、公判廷で申述べることに、必ずしも一致しないでも可いかも知れませぬ。又、たとひ賄賂を取つてゐても、辯護の仕方にては無罪放免になられるかも知れませぬ。併し堂々たる帝國の代議士となり、相當の教育あり、地位ある人々が、自分の犯したる罪を蔽はんが爲めに、豫審に於て述べ立てたる事柄まで、憶面なく打ち消して、自ら清きを装はんとするのは、あまりに鐵面皮な仕方である。社會を愚弄した遣方であると思はれます。私はかゝる連中によつて國事を議せられつゝ、あつたかと思ふと、誠に心細い感致します。

## ▲懺悔の價値

此時に當つて、唯獨り私の感心致したのは、横井時雄氏の態度であります。横井氏は今度の事件に付いては、始めから非常に懺悔せられた様子で、豫審でも公判廷でも、少しも隠す所なく、天下公衆の耳目の前に立ち、潔きよく罪人として自白したのであります。横井氏は、小楠先生の令息であります。基督教界の錚々たる方で、一時は同志社の社長をも勤めた人であります。此人にして天下の罪人となる、其胸中や實に察するに餘ありません。社會の人々は其名門の出であるとして云ふこと、大に彼を批難致しました。又ある人は、基督教界の名士であつたと云ふので、彼を攻撃致しました。併し未だ誰ありて彼の潔きよき懺悔に付いて、同情ある言葉を呈したるものを見ませぬ。私は横井氏が名門の出であり、基督教徒



てあつたと云ふ故を以て、その潔きよき懺悔をも、當然の出來事と看過するはあまりに酷であると思ふ。懺悔と云ふとは口でいへば、何でもないこととありますが、實際行ふと云ふことは、決して容易なことではありませぬ。他の代議士連が汲々乎として自己の非を覆はんとしてゐるのも之が爲めである。横井氏とて名譽を輕んずるのではない。否、其家柄と其地位とは、他の人々よりもより以上の名譽を重んぜしめたに相違ない、然るに此名譽と地位とを斷然放棄して、天下の一囚人として公衆の前に潔よく立つに至るまでには、餘程胸中の苦悶がなくてはならぬ。彼を思ひ之を察すると、横井氏の態度は餘程同情を寄すべき點があると思ふ。孔子は「過つて改むる、善之より大なるはなし」と云ひ、佛陀は「一念の懺

悔、よく十億劫の罪を除くと仰せられてあるからは、横井氏の懺悔は大に讃辭に値することと思ふ。世の人は之を以て直ちに横井氏の社會的自殺となすかも知れぬが、私は之を以つて横井氏の宗教的復活と稱へたいのである。横井氏の罪は悪むべきである。併しその罪に對する態度は稱讚すべきである。先年、ある銀行が破産したとき、中鉢美明氏が自己の全財産を擧げて、預金者に申し譯を致したといふことを聞きました。當時、法律上でいへば、必ずしも中鉢氏が全責任を負ふべき明文はなかつたのであります。氏は自ら責任を負うて私産を投じて一時の急を救つたと云ふことは、誠に實業界の美談でありました。中鉢氏のなした所と横井氏のそれとは、大に事情を異にし、其跡を異にしてゐますけれども、



その心事に至りては、共に相類する所があります。中鉢氏は、自分を信ずる預金者の爲めに、凡ての財産を投げ出して、極めて貧しき暮りに立歸られ、横井氏は自分の犯した罪の爲めに、名譽と地位とを潔く捨て、一囚人となつて公衆の前に立たれた。共に是れ近年の美談であります。

## ▲煩悶と虚榮

元來人間と云ふものは我慢の強いものである。自分をよく思はれよう、高く買つてもらいたいと云ふ性質が棄たらないのであります。一寸したことに、みえを飾つたり、上邊を繕ふ傾があつてなりません。悪いことをしたなら悪いことを致しました。罪を犯したなら罪を犯しましたと打出せばそれでよい。少しも六ヶ

敷事はない、面倒なことはない。然るに世人はこの容易い面倒のない事を却つて六ヶ敷考へ面倒に思つて、自ら知らず、罪惡の淵に沈んでしまふのは如何にも残念なことである。私は日頃常にかう考へてゐる。世の中に虚飾虚偽と云ふことがなかつたなら、どの位物事が簡單で、世話がいらぬか知らんと思ふ。赤裸々に自己の價値を認め、赤裸々に自己の現状を打出して世を渡ることが出来たなら、これ程氣樂なことはないと思ふ。試みに胸中に煩悶のある人は自己の胸に手をあて、その煩悶のよつて來るところを察して御覽なさい。必らず自分の我慢心や虚飾、虚榮心から來た煩悶が少なくなかないと思ふ。若し、その我慢心や虚榮心に氣付いて、あつまらない考を懐いてゐた。之れが即ち迷である。



感じて見ると、今まで苦にしたことが左程苦しくないやうになつて、俄かに胸中の平安を覺ゆることができます。

## ▲囚人の自由

先年、北海道の集治監にゐた一囚人が脱獄しまして、此處彼處と潜み匿れてゐましたが、胸中少しも安らかなるときがない。あるときは風の音にも探偵の來たのかと驚かされ、あるときは犬の吠ゆる聲にも、我身の罪を訶かるゝ心地がして、片時も氣の安まる時がなかつたので、遂に自首して再び牢獄の人となつたさうであります。又、江州膳所の監獄に居る一囚人が、其教誨師に向つて、社會に居ました時は、暫くの間も安心して眠つたことはありませなんだが、此處に來てからは安氣に熟睡いたしません」と答へたさうである。

るが、此等は共に始めは自分の眞價を人に見られまい、罪人を罪人として取扱はれまいと云ふ我慢心や、懸引心の爲めに非常に煩悶した極、遂に其煩悶に堪へずして牢獄の人となつたのであります。而して一度、牢獄の人となつて見れば、囚人が囚人として取扱はるのであるから、却つて氣樂で居心地がよく安氣に熟睡することの出來たのも尤もなことである。事柄こそ千差萬別なれ、吾等が煩悶苦痛を感ずる多くの場合は、大抵此囚人と同じ状態にあるのである。而して吾々はどうかして此苦を免れよう、煩悶をなくしようとして迷より迷に沈んで、遂に救ふ可らざるに至るのであります。

## ▲惑業苦



釋尊が初めての說法に惑業苦の説明があります。吾々の苦痛は業から起る。業は惑と云つて迷から生ずる。惑があるから業を作り、業を作るから苦を生ずる。此苦は更に第二の惑を作りて轉々止むと云ふことがない。此が吾人の状態である。此の惑の根元は無明である。煩惱である。此煩惱を斷絶して惑の本を斷てば、業苦も從つて滅ぶのである。吾々の虚榮心とか我慢心とか云ふものは此煩惱の働である。この我慢や虚榮の煩惱があるからして、吾々が永遠に迷を重ぬるのであります。普通に迷ひと云へば三世に涉りてのことのみと思つてゐるけれども、吾々現在の日常生活が實は迷ひなのであります。是處に氣付かして貰つて、此の迷ひの網を斷たなければ、平安の生活に入ることとは六ヶ敷い。即ち

自分の本統の價值を知つて包まず隠くさず、悪人は悪人として、善人は善人として赤裸々に打ち出して、掛引き懸値のない生活に入ることが肝要である。

▲天を相手にせよ

然しながら、實際に當つて我々がさう容易く赤裸々の状態になり得るかと云へば、決して出来ない。自分獨りはやるつもりでも、家族が許さない。家族は折合つても社會が許さない。甲も虚偽の生活をしてゐる。乙も假面をかぶつてゐる。丙丁戊己一として赤裸々の状態に立つ人はない。その内で、我れ獨り真面目になつたとて所詮のないことであると思はるゝ點がある。併し之れは考へるのまだ足りないのであります。彼の西郷南洲翁が人を相



手にするな天を相手にせよと云はれたのは誠に理のあることとてあります。吾々が仕事をするに人を相手にしてゐて眞劍の仕事は出来るものでありませぬ。天を相手としてした仕事で始めて、至誠神を動かす底の仕事が出来るのであります。今もその通りで、社會や人を相手にしてゐては、虚偽虚飾のない眞面目の生活に入ることは出来難い。佛を相手にして始めて眞面目な生活に入ることが出来るのであります。かの横井氏は、基督教信者であつたから、その懺悔たるや必ず自分信ずる神に對する懺悔であつたに相違ない。若し彼が社會に對し友人に對しての懺悔であつたならば、それは少しも顧みる價值はない。併し氏の過去を知るものは、その懺悔が義理一片のものでないことを知るに躊躇しな

い。否、さうあらんことを望んでゐる。今後氏の行動によりて、その懺悔が何程の價值あるかは事實に證明せらるゝことであるが、予は之を好意的に解釋して、氏の宗教的復活を望むと共に、吾等自ら省みて、佛陀に對して、掛引懸値なき生活に入らんことを望む次第であります。

## 相對の信と絶對の信

### ▲相對の信

信ずると云ふことは眞諦に於ては勿論であるが、お互俗諦の上にもなくてはならぬ事である。一家の内にては親子、夫婦、兄弟の間、皆此の信と云ふ事がなかつたならば、親子の間も、夫婦の間も、兄



弟の間も其の親みを缺くに至るのである。どんな仲のよい親子の間柄でも又は百年の苦樂を共にする夫婦の間でも一朝疑ひがあるると折角親い間が全く瓦解して仕舞ふ。是は何故であるかと云ふとお互の間の信は相對であつて絶對でない。絶對でないから或る所まで行くと行づまりが出来る。どの様に親しい間柄でも吾々相互の信は絶對であることができない。

▲曾參とオセロ

孔子の弟子の曾參は親孝行な人であつたが、或る時彼の母が機を織て居ると近所の人が出来て、曾參人を殺すと云うた。母親は別に驚く色も無く、私の子供は人を殺す様な者でないと答へた。然るに他の一人が出来て、再び曾參が人を殺したと云うた。母親は尙

我子の正しき人たるを信じて居るから、平氣で機を織りつゝいた。さる程に他の人が来て三たび曾參人を殺すと告げた。いくら我子を信じた母も斯く三度も告げられては心配で堪らない。機は道具を投じて町に走つたとある。後から調べて見ると人違であつたのである。が斯くも親しい曾參母子の間でも、三度も同じ事を告げられては疑ひの起らない譯には行かぬ、人間同志の信が絶對でないのは是でよく分かる。

又シエキスピアの傑作オセロの中には、主人公オセロが最愛の婦人を妻として大に喜んだけれども、唯一點の疑より人の語を信じた爲に、此の最愛の妻を殺し、後に事實が分つて益々後悔し、終に自殺して仕舞ふと云ふ大悲劇を生じたのである。之を以て見て



も夫婦の間の信も絶對と云はれないのである。

▲器物は壞るゝものなり

世間一般の人は絶對に信ずる價値の無い、又信することの出来ないものを捕へて間違ないと思つて居るから、一朝にして自分の考と違ふと煩悶を生ずるのである。吾々は信すべきものを信ずると同時に、相對のものは相對として扱ふが必要である。エヒクテオスは斯ういうて居る。器物を取扱ふ時、器物は壞れるものであると考へよ。然るに世間の人は、壞れるものを以て、恰も壞れぬものと思つて取扱ふから大變間違て、一朝壞れると悲み叫ぶのである。初めからさういふ積りて取扱へば差支ないのである。丁度今吾々の場合も其の通りで、親子、夫婦、兄弟の間もある程度まで

は互に扶け合つて往くべき筈なれども、何處迄も信賴すべきかといふに、そこに限りがある。行き詰りがある。此に至て人を咎め天を怨み、煩悶苦痛せねばならぬ。吾々は平時に於て是等の事柄を熟考して置いて、相對の者は相對とし、絶對の者は絶對として信ぜねばならぬのである。

▲慰安者たる御佛

然らば吾々人生に於て何が絶對であるか、絶對的に信賴すべきものは何かと云へば、申す迄もなく佛の大慈悲である。佛を信ずるといふことが此世に於ける絶對の信仰、此を除いては外に吾々は絶對の信は見出し能はぬのである。吾々は自己の能力、體力、境遇を考へて見ても、どこにも絶對に信賴すべきものを少しも有せ



ぬ。自己自からも信ずる力がない。況や妻子眷屬に於て、絶對の信は措かれぬ。さう考へると吾々は心細い、淋しい感を禁じ得ない其時に只大慈大悲の佛が私の慰安者、救済者となり、絶對の神聖な御親であると聞かして貰うた時、非常に心丈夫な大安心をさせて頂くことが出来る。其佛を信ずるには何ういふ風にしたら信ずることが出来るかといふと、自分の學問や理窟では到底信じられぬ。自分のさゝやかな智慧分別を捨て、佛勅に信順するのみでなくてはならぬ。此點に於て吾々は法然上人の御弟子隨蓮の態度を學ぶべきである。

▲隨蓮坊の信仰

隨蓮は法然上人の弟子中では學問の無い人て在つたが、上人に

忠實に仕へて配所へも従うて行かれた程である。上人御臨終の時、隨蓮を枕元へ呼ばれ、念佛は様なきを様とするなり、たゞ平らに稱名の行を専らにすべしと仰せられた。隨蓮大に喜び上人御往生の後も念佛三昧に致して居つた。然るに御弟子中の一人が「隨蓮お前は念佛ばかり唱へて居るが、三心具足せねば往生はかなはぬぞよ」と申すと、隨蓮は

「故上人は念佛は義なき義とす。唯うに佛語を信じて念佛せよとて全く三心の事は仰せられなかつた」と答へた。併し右の弟子は

「それはお前達のやうな學問の出来ないものゝ爲に特にさう仰



せられたので、三心四修は必ずせねば往生は出来ぬものである」と云はれ、さてはさうであつたかと疑の心を起し、何人かに尋ねたと思ふ内一二月経て心配して居つたが或る夜夢に、法勝寺の西門を入つて見ると池に蓮華が咲いて居る。法然上人が御出でになり、隨蓮が申上げぬ内に御師匠上人から

「汝此の程嘆くことありゆめ／＼煩ふ勿れ」

と仰せられた。乃て隨蓮は他の弟子の言を述べて自分の迷うて居る事を申上げると、上人は

「譬へば僻事をいふものありて、彼池の蓮華を蓮華には非ず、櫻と

云は、汝は信ぜんや」

と仰せられた。隨蓮は

「現に蓮華にて侍り、いかに人申すともいかて櫻とは思ひはべらん」

と答へた。其時に上人は

「念佛の義亦是の如し、源空が汝に教へし言葉を信ぜば蓮華を蓮華と云はんが如し。深く信じて念佛を申すべし。惡義邪氣の梅櫻をばゆめ／＼信ず可からず。」

と仰せられたが、こゝて夢がさめて、日頃の不審悉く散じ疑心も忽ち晴れ渡つたのであつた。之より念佛三昧にて一生を送られたのである。此隨蓮の態度が吾々の修道者の學ぶべきものであらう。哲學とか宗教學とか専門の研究をした所で、つまりは絶對の佛の前には其學問研究をすて、かゝらねばならぬ。學問や理窟



ては到底間に合はぬ。吾々は唯親鸞聖人の御教を疑ひなく信じ、其の通りにして行くより外に道はないのである。聖人は親鸞におきては、只念佛して彌陀に助けられ参らすべしとよき人の仰せを蒙りて、信ずる外に別の仔細なきなり。と仰せられた。此の御精神のまゝをやるのである。隨蓮のあとを慕うて、ありがたき絶對の信を頂かねばならぬのである。

▲高楠博士の逸話

先年島地和上の御病氣の時、吾々はお互に代る／＼御見舞に伺うた。或る朝高楠博士が見えて、吾々二三の人に向つて、君達は女子を負うたことがあるかと尋ねられた。問があまり奇抜であつたので女子とはどんなのですかと反問した處、四十以上の女子といふことであつた。全體之は何であるかといふと、博士は此大學病院に来る積りて電車を本郷區役所前で下りると、車夫の三四人溜りがある、そこに一人の婦人が居つて大學の外科室へ行く道を尋ねて居つた。併し雪の後で道が非常に悪いし、又此婦人が一本足で双方の手に棒を以て支へて居るので、車に乗るやうに勧めたけれども、此婦人は乗らなんだ。そこで博士が同道しようといふと云うて連れ來られたが、如何にも道路の泥濘と、不自由な跛足で一層困つたので、博士は「負うてあげませう」といふと、婦人は何の遠慮なく「ありがたうございます。」

と云ひ乍らすぐ負はれて病院まで連れて行かれたとの事である。此の婦人が見えず知らずの紳士に直ぐ負はれたのは、一には自らの



不具を知り、一には博士の親切を心から感謝して之に依頼したからである。今吾々は佛の呼び聲に遠慮なく従はねばならぬ。之が眞の絶對の信である。博士の逸話は獨り博士の美談であるのみならず、吾々お互の修養上の好適例として尤も興味のあることと思ふのである。

### 念佛と修養

#### ▲信仰と修養

蓮如上人の御一代開書に、ある人が自分の心中を自白して、我心は只籠に水を入れ候ように、佛法の御座敷にては、ありがたくもたふとくも存候が、やがてもとの心中になされ候。」と申上げた所が、

蓮如上人は、その籠を水につけよ。我身をば法にひて、おけよ。」と仰せられた。之は私共に對する好き御示してあると思ふ。眼を聖教にさらし、或は佛法の御話など聽聞した當座は、ありがたい感じも起れば、たふとい念も起るけれども、其場を過ぐると、何んとも感じがなくなつて、甚しきは日々罪惡の道に深入りしつゝあるのであります。是に於て私共は絶えず修養の道に志ざして、乾き易き我心の籠の中へ、信仰の水の絶えないやうに心掛けたいと思ふ。

#### ▲五種の修養法

修養の道は多端である。心掛け次第では何物でも修養の種となり得るものである。併し極めて通俗に、一般向きの考で申すと



五種類あるかと思ふ、第一讀書によるもの、第二聽聞によるもの、第三談合によるもの、第四座禪によるもの、第五念佛によるもの、之である。第一の讀書によるものとは、即ち古聖賢又は教祖、宗祖の聖教著書を繙くことである。第二の聽聞によるものとは、乃ち名僧知識の講話演説に耳傾くることである。第三の談合とは自己の所信を告白して知識の批評を乞ひ、或は疑はしきを尋ねて不審を晴らすことである。ごくシンミリとした會合に於て互に信仰談話を試むるが如きは之である。併し此種の會合は中心にシツカリした人がゐないと却つて難駁に流れて會その物の目的を果さないことがある。第四は座禪法である。之は座禪して吾々の精神を鍊り鍛ふ法である。宋儒の靜座法も矢張り此種の修養法である。

ある。第五は念佛法である。之れは佛名を念ずることによつて我が修養となす方法である。

#### ▲修養法の難易

凡そ此等の方法は我等が皆併せ用ゐて修養の工夫を積むに缺く可らざるものである。併し其一々に付いて吟味すると、先づ初めの四つは何れも時間と場所と境遇の制限を受けてゐる。何時でも時間を選ばず、常に我等が修養に志すと云ふとは不可能である。又場所の關係に於ても然りである。何處にゐても修養が出来ること云ふ譯に行かないものがある。例へば讀書にしても講話を聴くことにしても、朝から晩まで讀書に耽ることも出来なければ、又、年が年中説教や講話の聽聞を繼げると云ふことは實際に不可



能の事である。座禪の如きも然りである。一日に一度か二度か時間を定めて座禪して心臆を練るとか、心を静めて静思することは非常に宜敷い修養法であるが、實際多忙なる生活に於ては、それさへ出来かぬ場合が多いのである。獨り念佛法になると、場所と時間と境遇との關係を超越して、常住不斷に我等の修養を繼續し行くことが出来る。極めて手輕な、而も重寶なものである。蓮師は籠を水にひたせと仰せられたが、其籠を水にひたす方法として念佛は尤も適當であらうと思ふ。

▲念佛の四長所

さて念佛は此の如く時處位の關係を超越した便利至極なものであるが、念佛その物が果して我々の修養に資する丈の價值があ

るかどうか、其邊の處を今少し吟味して見ようと思ふ。予は念佛の長所を四つに分けて御話して見たいと思ふ。

一、念佛は宗教上の信仰の形式に於て尤も進歩せるものであると思ふ。

二、念佛は意義に於て多含なるものである。

三、念佛は吾人と佛と直接の交渉をなすものである。

四、念佛は之を繰り返へすことによつて、不知不識の間に吾人の信仰を圓熟せしむるものである。

▲最も進歩したる信仰形式

先念佛は宗教上の信仰形式に於て尤も進歩せるものである。多くの宗教を見るに其信仰の形式は非常に複雑してゐる。我佛



教に於ても各派に於て色々異なる形式がある。中には随分複雑したものがあつた。基督教に於ても舊教の形式はなかく複雑である。此點になると新教などは餘程簡單である。淨土眞宗になると更に簡單である。新教などの信仰形式はたゞかの祈禱であるが、眞宗の形式は念佛に盡きてゐる。

眞宗にては讀經もやれば禮拜もやる。併し之は信仰形式の必要條件ではない。信仰に於ては唯此念佛六字に限られてある。此に至ると新教の祈禱は餘程進歩した形式の様であるが、念佛の形式の更に進歩してゐるのには如かない。

#### ▲無限の意義を含む

次に念佛は意義に於て多含である。南無阿彌陀佛と云ふ六字

の名號はその數僅かに六字であるが、非常に多様の意義を含んでゐる。南無と云ふことは歸依の意である。歸命の意である。南無觀世音菩薩南無八幡大菩薩南無大日如來など皆南無と云ふは此歸命歸依の意である。阿彌陀佛とは無量壽佛、無量光佛の意である。換言せば無量の徳と無量の智とを兼そなへ玉へる靈體である。此靈體は即ち吾等の救ひの主である。吾々が此靈體に歸命すると云ふことは、即ち吾々が此の靈體に救はるゝと云ふことを意味してゐるのである。又南無はたのめの意である。阿彌陀佛は救ひの體である。故にたのめ助くるの心が、此六字の心である。是に於て乎吾々は之れを如來の招喚の御勅命と見るのである。同時に吾々の側から之を見ると、御受けの言葉とも見ること



が出来来る。感謝の意味にも取ることが出来る。此の如くして南無阿彌陀佛の六字の中には、歸依、渴仰、救濟、感謝等の無限の意義が包含されてあるのである。尤も簡單なる形式が尤も複雑なる信仰状態を表はすシムボルとなつてゐる事は、深く吾人の注意すべきことであると思ふ。先年神戸である基督教の牧師に逢ひました節、其牧師が

「佛教の念佛は誠に重寶なものである。念佛は意味が多様であるから如何なる場合にも用ゐられる。喜びの時も悲みの時も、感謝も祈禱も皆此の六字の中に含まれてゐる。あんな重寶なものは外にはありませぬ。基督教にはどうもお念佛に相應したものが無い。かのアーメンも悪いことはないが、凡ての場合に唱ふると

云ふ譯に行きませぬ。どうも寫りが悪い。其點になると念佛は誠に調子がよい。それ故私は此節は念佛を唱へさして貰つてゐますと申した事がありますが、私は誠に面白いことと思ひました。梁川門下の人々には基督教徒にて往々念佛を唱ふる者があると云ふことを屢々承りましたが、神戸の牧師も矢張り梁川氏の感化を受けられた人であると云ふことを後に承りました。

#### ▲佛凡融合の力あり

次に念佛は我々凡夫をして直ちに佛に融合せしむる尤も簡單なる形式であると思ふ。換言すれば佛と凡夫と直接交渉を遂げる事の出来る尤も便利なる形である。吾々は迷ひの凡夫である。佛は悟りの境涯である。吾々は云はば奈落の底に迷つて居る。



佛は九天の上に解脱してゐる。此懸隔甚しき佛と我れとが、南無阿彌陀佛と唱ふる一瞬時に我佛に一致し、佛我と抱合して、所謂機法一體、佛凡不二の境遇に達せしむるもの實に念佛の力である。元來信仰なるものは理窟を離れたるものであるが、信仰に入るの歷程としては随分理窟を許すともある。併し理窟から入りたる信仰（もしかゝる信仰ありとすれば）は直觀的に入つた信仰と比べると信仰の温まりが低い。他の言葉でいふと、理窟より入りたる信仰は、理論と云ふ一種の媒介物を透して佛と交渉するのであるから、云はゞ間接である。佛と我との間に何んだか薄紙を挟んだ様な感がある。従つて非常なる信仰の熱度は出てこない。念佛は徹頭徹尾理窟を許さない。従つて念佛した瞬間に吾々が贏ち

得るところのものは、佛に直接に投合すると云ふことである。之が念佛の尤も難有い所である。

▲信仰を圓熟せしむ

最後に念佛は之を繰り返へすことによつて不知不識の裡に信仰醇熟の境に達するのである。吾々は念佛の意味を聞いて念佛その物の決して輕蔑すべきものでないことを知つても、只それ丈では念佛その物が左程難有くも感ぜられず、又我力となりて我を左右する丈の權威を持たない。けれども吾々が之を絶えず唱へて繰り返してゐると、いつとはなしに念佛の味ひも出れば、難有味も知れてくる。かくなりて始めて我信仰圓熟の境に達することが出来る。此點に關しても念佛は實行的のものであつて、理論的



のものでないことが分る。嘗て同志の清談會の席上にて中村代議士がせられた入信の告白は、最もよく上の意味を説明してゐると思ふ。氏が若年の頃博多の萬行寺七里和上に面會せられた。其時氏は和上に宗教上の問題を尋ねると思ひの外、ごく俗的な金持ちになる方法を尋ねられた。すると和上が「そんなことは拙者よりお前の方がよく知つてゐる筈だ」と答へられた。

中村「それでも私には一向分りませぬ」

和上「分らないことはない筈だ」

中村「分りません」

和上「分らんければ教へてやる。外ではない儉約して働くのだ、中村「その位の事ならよく知つてゐます」

和上聲に應じて「知つてゐても行へぬだらう。世の中の事は知つた丈では何にも役に立つものではない。實際行ふて始めて價値があるものである」

と、それから和上が監獄囚徒の實例より、彼れ等は悪いことをしてならない、又したならば監獄に來なければならぬと云ふことは百も承知だが、實際に實行が出来ない爲めに皆罪人となつたのである。お前も理屈は何程知つても實際が伴はなければ三文の價値もない。まあ暫らく此處にゐてお念佛でも唱へたらよからうと云はれて、中村氏も成程と合點して、それから半年あまりも和上の側にゐて念佛三昧に耽られたさうである。然るに始めは無意義に唱へてゐたお念佛がいつとはなしに難有く感ずる様になつ



て、今日まで繼續するようになられたさうである。和上の言葉に、「久しくして醇熟す」と云ふことを繰り返されたさうであるが如何にもその言葉の通りである。念佛の味は只唱へることによりてのみ味ひ得べき味ひである。

#### ▲救済は信の一字に歸す

以上は予が思ひ付きたる念佛の長所である。併し是に誤解されてならないことは、念佛は我々が之を唱ふる事によつて救はるるのではなくして、唱ふる念佛其ものに救はるゝのである。我が唱へたる念佛に救ひの力があるのではなくして、我に唱へられ玉ふ佛に救ひの力があるからである。換言すれば、我等の救済は只だ信の一字に歸するのであつて、唱ふる稱名は感謝の稱名であり、

報恩の稱名であるのであることを忘れてはならぬ。此の如く念佛は色々の長所を有して、而も時處位の關係を超越してゐるものでありますから、吾々日常生活の上に於て絶えず之を繰り返すことによつて、我々が人生の軌道を脱出することなき様警戒を加ふることを得るのであります。古人は腹の立つとき、一つ二つ三つと數を十迄數へて、それから怒るなら怒るがよいと申しました。之も一の修養法でありますが、我等は腹の立た時、慾の起つた時、先づお念佛を二三度繰り返したならば、大抵の腹立ちや慾心は抑ゆることが出来ようと思ひます。かくして我々は、貧慾の起るとき、愚痴の起るとき、瞋恚の焰燃ゆるとき、聲に出して南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛と稱へることによつて、佛恩を感謝しつゝ、不知不識の



裡に煩惱を退治する様に致したいと思ひます。かくして斷へず修養して進めば、蓮師の所謂籠を水にひたしたる状態にいつかは到達することが出来ることを固く信じて疑はないのであります。

南無と云へば阿彌陀來にけり一つ身を

我れとやいわむ佛とやいはむ。(古歌)

### 易行即難行

#### ▲難易の二道

一見すれば至つて易いやうな事でも、實際に當つて見ると之が却てむづかしい事がある。易行難行といふ語は龍樹菩薩の易行品に

佛法に無量の門あり。世間の道に難あり。易あり、陸路の歩行は則ち苦しく、水道の乗船は則ち楽しきが如し。

と云ふ所から出て居る。今吾々が悟の道に進むのに自力難行の道を取るか、又は他力易行の道を取りて不退轉の位に進むかの二つがあるのである。前者は即ち難行で後者は即ち易行である。

曾て高山樗牛が「人の向上に二法がある。一には自己の大なることを信じて奮勵努力して進むのである。今一つは自身の小なることを自覺し、無能なることを知て修養するのである」と云ふ意味のことをいつた。釋尊が天上天下唯我獨尊で進まれたのは前者に當り、ソクラテースが自己の無知を認めて修養したのは後者である。前者は難行道に入る門戸である。後者は易行道に入る門



戸である。

▲青年は難行の道程にあり

元氣旺盛なる青年時代に在ては、自分を信ずることなか／＼強く、従つて克己奮闘とか、難行苦行といふ方を進むのは、之が勇ましい事に感じられる。如何にも男らしく壯烈である。故に青年求道者が或は禪學に向ひ、或は日蓮上人に向て進むのは、尤もな次第である。之に反して、易行道は如何にも平坦なる大道を歩むが如くて、何等の波瀾もなく、何等の困難もなく、婦女子ならば兔に角、男子が之に向ふのは如何にも意氣地がない。馬鹿／＼しいやうにも思はれる。例へやりきれないまでも、仆れて後已むの決心で難行道に進んで往くと云ふのが一般の傾きである。何等の努力な

しに直に易行道に走るが如きは、實に腰の弱い、無氣力な事であるといふ感じがある。

斯ういふ感じが一般求道者の間に存して居ることと思ふ。是は一往尤もな事である。吾々の日常生活の状態に於ては、飽くまで克己とか、奮闘とか、忍耐とか、禁慾とか云ふことが必要であるかも知れないのである。

▲自力難行の悲哀

併しながら其が果して、何處まで續けてあらうか。果して其によりて最後の目的を達することが出来やうか。其邊は非常に疑はしい點である。若し眞に永續的の元氣を以て、斷乎として進んで行くことの出来る人があるならば、其は非常な幸福な人である



と思ふ。又自分で斯くどこまでもやつて行けると信ずることの出来る人は幸福なことである。併し其の元氣は中絶することはないであらうか、其の確信が破壊することはないでせうか。

若しあるとせば、其時の煩悶苦痛は果して何んなであらうか。學校の生徒が今まで杖とも柱とも頼んだ両親が生みの親でなかつたと云ふことを聞いた時に非常に失望して、之より母に向つて態度が一變して、再びもとの如き親しい間柄となることが出来なくなつたとの事實がある。自己を信ずる人が行詰りの状態に達した時には、恐らくは此の生徒以上の煩悶に陥ることであらう。支那の雲棲大師は聖道門の大徳であつたが曾て非常な火傷をされた時、痛みが堪えられぬ。終に唱名念佛せられた。其の時大師

は弟子に向つて、

「斯ういふ時には、到底堪えられぬので、思はず念佛を稱へて、佛の力を仰ぐの外は無し」と云はれたのである。

▲易行品に現はれたる二道

龍樹大士は易行品の中に於て之を示されたが、其を見ると餘程用意周到の點がある。大士は初めから易行道を探られないで、難行道を説かれたのである。弟子が其の難行に堪え難くして、別に見易い法門はないであらうかと歎かれた時に、大士は、それは停弱怯劣の言である。丈夫志幹の言ては無し」と一喝せられた。然るに更に易行の法を求めて息まないのので、終に他力易行の道を説か



れたのである。而して其も初めは菩薩の易行で阿彌陀佛の易行ではなかつたが、最後に至つて阿彌陀佛の易行を示され、自分も之に歸依して居るのであると告白せられた。之れ龍樹大士の大に意の在る所で、易行道の入り難きは、難行道を経て初めて分かる。一見すれば易行道は馬鹿くしい感じがするのであるが、此の馬鹿くしいことが、非常な意味のあることとなつて居るのである。

## ▲致富の秘訣は水汲み

今は昔寛政年間、駿河國駿府(今の静岡)に黒鐵屋といふ財産家があつた。元は小さな金物屋であつたが、主人の丹精で、段々富限者となり、町で第一流の仲間入りをする程になつて來たのである。そこで此の家に来る人々は主人に向つて、金持になる方法を問ひま

すと、主人は勤勉と節儉の外に別段の秘法もないと誰にても答へて居つた。然るに此の家に入出する喜八と云ふ男が至て律氣者である丈に、主人の金持になる法は、只勤勉と節儉丈けてはない、何か外にあるだらうと思ふて、主人に尋ねた處、初めは普通に答へたが頻りに喜八が問ふので、

「お前が聞いても、ばかくしい位のものだが、本氣でやるならば教へてやらうから二日程來るがよい」と云ひました。

翌日喜八は主人の所へ出ると、主人は早速底のぬけた四斗樽を井戸端へ置いて、之に水を汲めと云ふた。いかに律氣な喜八も之れには驚いた。主人は

「それだからばかくしいのだ、いやならやめるがよい」



喜八は約束したので、切に水を汲んだが、到底溜らない。其日は  
 すんで翌日來ると、今度は底のある四斗樽に釣瓶の底を抜いて樽  
 に一杯汲めと云ふ。實に奇妙な事をさせると思つたが、約束故底  
 なし釣瓶を上げ下げして居る。とても一日かゝつたとて之で水  
 は汲めはせぬと思ひ乍らやつて居ると、不圖氣のついたことは釣  
 瓶についた雫が五六滴づゝ樽の底に溜まる。之が少しつゝでは  
 あるが、終に其日の午後四時頃には樽一杯に水がたまつた。喜八  
 は主人の所へかけつけて汲んだことを云ふと、

「之が私の財産を蓄積した方法である。」

と云ふたが、喜八は其の解釋に苦しんだ。主人は

「いくら働いても、どん／＼使へば際限は無い。たとへ零碎なも

のでも集まれば此の通りである」と説明したので、喜八は成程と感心したと云ふことである。

▲親鸞聖人の易行

喜八の水汲みは實に馬鹿／＼しい。併し黒鐵屋の主人は此の  
 馬鹿／＼しいことを實行して、莫大の産を積み上げたので、そこに  
 深い味ひがある。親鸞聖人が貴族と云ふ門地をすて、佛門に歸  
 せられたのは側から云へば馬鹿／＼しい、加之嘆異鈔に於て

「親鸞におきては。たい念佛して彌陀に助けられ參らすべし  
 とよきひとの仰せをかうむりて、信ずる外に別の子細なきなり。  
 念佛はまことに淨土に生るゝたねにてや侍べるらん、また地獄  
 におへる業にてや侍べるらん、總じてもて存知せざるなり。た